未返却魔導書と科学のススメ

藤本 天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。 このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。 そのため、作者また

小説タイト

未返却魔導書と科学のススメ

Vロード

【作者名】

藤本 天

【あらすじ】

開催される。 校、セフィールド学術院(通称『学院』)で『学術研究発表会』 シオン大陸ザラート王国の学問の街チュー ؠٳ チューリー番の学

その上、 新学科設立も決まって浮足立つ『学院』。

もちろん、 お祭り騒ぎの中、 王立学院図書館の『禁制魔導書』達も興味深々。 とある魔導書が貸出期間を過ぎても帰ってこない

しかも、 借りた魔導師は他人にまた貸ししていた!?

日常という名の序章 (前書き)

で す。 今回のメインステー ジは王立学院図書館があるセフィールド学術院 皆様の励ましメッセージを受けて第二弾、投稿する事が出来ました。

どうぞ、お楽しみください。

日常という名の序章

.....さわ、さわ

..... ちちちっ、ぴー、 ちちちち

膏のように白く滑らかな肌、女には無い鋭く怜悧な美貌が口乳をいいな濃い藍色の髪、最高級の琥珀のような涼しげな目、 それに誘われるように本を読んでいた主は顔を上げた。 露わになる。 頭上で木々が揺れ、 開いていた本の上に葉っぱがひらりと落ちる。 女には無い鋭く怜悧な美貌が日の下に 雪ァラバス **石**

色合いの木々。 極上の染料を使って染め抜いたかのような爽やかな色の空、 優しい

青々とした芝生の上に座る彼の傍には分厚い本が積み重なっている。 それを十分に眺めた後、 美貌の主は本に目を移す。

9 天の天蓋』 ` 『四大元素の調和』 ` 9 絶対無。 ` 9 始まりの叡智』

全て魔導書。 小難しい題名と本の所々に施された魔導的な文字や円陣からするに、

が、 小山のように積み重なっている魔導書の隣の彼は随分ラフな格好だ 魔導師だ。

スフォルツィアが彼の身分であり、 王都で王に仕える宮廷魔導師アヴィ リス・ 職業である。 ツヴァ イ ॥ ネル ロウ

トを纏っていない。 今日の彼は宮廷魔導師のお仕着せである詰襟の制服やコー

その代わりに彼のシャ ツの首元にはルー プ タイを留める金属の留

め具が付いている。

ザインを施されている。 星が中心に描かれ、 その金属の留め具は銀製で、 五芒星の上で翼が生えた獅子が吼えるようなデ 己の尾を噛む竜に守られるように五芒

魔導師同士の互助組織、 <クラン > の組合員が持つエンブレム。

こちらも肩がこる。 休日に仰々しい宮廷魔導師の徽章をつけ、 他人に気を遣わせるのは

巻き込まれずに済む。 とりあえず、自分が魔導師である事さえ示されば余計な争いごとに

というのが彼の考えであり、 つまり、 今日彼は休日なのである。

だが、 かれた魔導書に全く関係のない本である。 いま彼が持ち、 熱心に読んでいる本は、 彼の身分や小脇に置

 \Box よくわかる !セフィ ルド学術院・学部案内&学術院入門』

「なに、読んでるの?」

アヴィ 黒に見えるほど深い栗色の髪を肩先で切りそろえ、 顔立ちは見苦しくない程度に整ってはいるが、 に深い色の瞳を丸くしてアヴィリスの開いている本を見下ろす。 の前では明らかに霞む、十人並みの容姿。 シンプルなブラウスにプリーツスカートを纏う体は華奢で小柄。 リスが顔を上げた先にいたのはアヴィリスより年下の少女。 アヴィリスの美しさ 新月の夜のよう

学校案内?何でそんなものわざわざ読んでるの?」

きょとん。 と目を丸くする少女にアヴィリスは軽く溜息を吐く。

ここがどれほど学部が多いか忘れたか?ユーリ」

溜息交じりに声をかけられたユーリは、 むっと魔導師を睨む。

が、 いや、 何であたしの学校案内教本を読んでるのかって話なんだけど?」 だから。 そうじゃなくて、 学術院の生徒でもないあ んた

「興味だ」

しれっと言い返されたユーリは溜息を吐いた。「あ、そー」

が出来ているのか?」 ところで、 구 IJ お前がここに来たということは、 お茶の用意

アヴィリスは言いながら首を巡らせる。

亜麻色の布が敷かれ、 芝生が広がり、野の花がちょこり、ちょこりと顔を出す芝生庭園に カップが乗っている。 その上にバスケットとティーポット、 ティー

それを見たアヴィリスは魔導書や本を両腕に抱え持って、 とそちらに向かう。 いそいそ

時間に参加してるのかな?」 『……… 毎度毎度思うんだけどね。 どうしてあんたがあたしの癒し

微妙に恨みがましい口調のユー 文句があるなら、 今日俺が持ってきた茶菓子はいらないな? リにアヴィリスはしれっと言い下ろ

を盾に取るなんて、 うつ。 王都の三ツ星菓子屋プティ 卑怯な!!」 フィ オー レのフルー ツケーキ

物をこれまたたっぷり生地に練り込んだ、ずっしりと重いパウンドーッ バスケットの中のお皿の上で果実酒をたっぷり染み込ませた乾燥果 ーキがコーティングに使われたシロップを艶やかに光らせている。

ューリでは食べられない逸品。 王都在住の宮廷魔導師であるアヴィ リスがいなければ、 片田舎のチ

よって。

ブティー 「アヴィ ですよ」 リスさん。 今日のお茶はミントとカモミー ルを入れたハー

リはお茶をカップに注いでアヴィリスに渡す。

含む。 カップを受け取ったアヴィリスは呆れながら、 「切り替え早いな、 お前」 ハー ブティー を口に

「ケーキに罪はありませんから!!」

「お前にはプライドがないな」

堂々と言い切ったユーリにアヴィリスは溜息を吐く。

「プライドでケーキは食べられないでしょーが」

お前は本当にマルグリッ ト伯爵家の息女なのか? 意地汚いな」

えたら良いっていうのがうちの家訓なの」 どんな立場に落ちようが、落とされようが生き延びて死に際に笑

意地汚いと言われたのが、さすがに腹が立ったのか、 ッと澄ました顔でケーキを頬張る。 구 リはツン

それ以前に、 ...何というか、 それがお前の意地汚さにどうつながるんだ?」 貴族にあるまじきたくましさだな。 になっ

方はするなっていうこと。 「意地汚い、 意地汚い失礼な。 ん~!!おいしい~!!」 まぁ、 要は後悔するような生き

ティー フルー ツケー をすする。 キにうっとりするユーリを見て、 アヴィリスはハーブ

ケーキごとき、 食わんでも後悔はせんだろう?」

う。 「いや、 アヴィリスさん!!」 このケーキは食べなきゃ損する!!損してた! ありがと

゙......喜んでもらえて結構だ」

た。 アヴィリスはきらきら目を輝かせて喜ぶユー リに反論する気が失せ

皿に盛られて渡されたケーキを一切れ、 アヴィリスも頬張る。

「うまいな」

「でしょう!?」

「それに、ハーブティー もよく合うな」

「あ、でもコレだと翠茶もよくない?」

『翠茶?』

学術院の普通科植物学部の生徒が茶の木を品種改良させて作ったお だけさせて作ったお茶なの。 「王都によく出る紅茶とは違って、 チューリの特産品。 摘んだ茶葉を発酵させずに乾燥 このセフィ I ルド

「ほう」

このハーブティー が無くなったら淹れてあげる。 おいしいよ」

郁とした香りを放つ。 白いカップに深い目が覚めるような綺麗な翠色の液体が注がれ、 馥

その香りと独特の渋みを味わったアヴィリスはほぅっと息を吐く。

しかし、ここの学校は実に多様だな」

辞書のような分厚さの学校案内教本をアヴィリスがめくる。

「 まぁ、学問の街チュー リー番の学校だからね」

魔導科や騎士科やらはいいとして、 普通科の学部は多すぎだろう」

「うん、 になるんだよ」 あ でも来学期から、 普通科から科学部が独立して科学科

そうなのか?」

7 「うん。 いまはどこの学部までが科学科に入るかの最終調整中だっ

ふう

学術研究発表会』があるから来てみれば?」 そうだ。 この学院の学科と学部の事知りたかったら来週に

『学術研究発表会』?」

ことになるから、 たら、新学科三年生はそれぞれ学部を決めてより専門的に勉強する の研究内容とかどういうことを勉強するのかの説明会があるの」 「通称『学研』って言うんだけど。 学部申請日の一週間前に各々の学科ごとに学部で 秋になって、 新学期が始まっ

ほお」

見学なら出来るんじゃないかな」 一般の人.....は見学できないけど、 魔導師だったら魔導科とかの

アヴィリスは無表情のまま学校案内教本を見下ろす。

お前はどの学部に入るか決めてるのか?」

あ? とりあえず、あたしも『学研』見学してからにしようと思う」う~ん。 文学部と文化学部のどっちかにしようと思ってるけど.. まだ決めてないけど、..... 一応文学部希望、

ふう 学研』 ねぇ」

アヴィ リスは翠茶を飲みながら、ぼんやりと空を見上げる。

あの『迷子の魔導書』事件から早三ヶ月。

初夏のさわやかな風を受けてお茶会を楽しむ二人がいるのは、 番の学校・セフィー ルド学術院通称『学院』 の敷地内に立つ チュ

王立学院図書館の最上階。

立学院図書館の植物園に彼らはいた。わずかな者しかその存在を知らず、そこに辿り着く事も出来ない王

11

- Pいま話題の例のアレ

科学科入りに五百ソール」 「天文学部、 機工学部、 物理部、 化学学部、 生物学部、 科学学部が

「それに植物学部をプラスして千ソール」

「うわ、お前。博打打ちだな~」

「じゃあ、お前はどうよ」

科学科入りに千ソール」 「うろん。 ここは手堅く、 科学、 機 工、 物理、 化学、 生物の学部が

で魔導師たちが頭を寄せ合って何やら話し合っている。 王立学院図書館魔導階、 通称『魔導師の溜り場』 と呼ばれる談話室

「何をしているんだ? あれは」

魔導書を片手にアヴィリスは首を傾げる。

彼らの話を拾い聞き、そして彼らの手元でちゃらちゃらと硬貨の重 なり合う音からするに何か賭け事をやっているらしい。

学部を予想して賭けているんじゃよ」 「うん? あれはな、 今度この『学院』 に出来る新学科に加入する

材のような瞳をもつ年老いた魔導師。 アヴィリスの声に応えたのは真っ白な髪によく磨きこまれた古い樫マーク

あなたは.....」

アヴィリスの視線を受けた老魔導師は丸い眼鏡越しにすいっとアヴ リスに微笑んだ。

「ロッジ爺さんじゃよ。 忘れたかね?」

「.....いいえ」

彼は『魔導師の溜り場』 で牢名主のように居座っている、常連魔導師だ。 首を振ったアヴィリスにロッジ老魔導師はにこりと微笑む。 と呼ばれる王立学院図書館魔導階の談話室

問に応える事が多く、 そうなると自然、この王立学院図書館利用初心者の魔導師たちの質 の名物老魔導師になっている。 『ロッジ爺さん』という愛称ですっかりここ

いい加減じゃったんじゃよ」 そもそも、 ここの『学院』 は普通科というものの定義が恐ろし

· はあ」

擁護出来たな」 い、そんな学問はとりあえず普通科という事で纏めておったらしい」 「魔導でもない、 いうか魔導でも医療でも美術でもない学問をよくあそこまで 医療でもない、美術でもない、 士官に必要でも

こす。 アヴィ リスは多彩すぎるセフィー ルド学術院普通科の学部を思い 起

ながら、 まぜ普通科じゃ」 向きされん学問を専門にする学者達がここに集って相互に助け合い 「そこは、 世の中に自分達の学問を広めていっ ほれ、 学問の街チューリらしいところじゃの。 た結果が、 あのごちゃ 誰にも見

なるほど」

学問という学問を擁護する学問の街チュー 普通科の学部数が恐ろしく多い理由が少しわかった気がする。 と認められ、 その学問を修めたいと思う生徒が集えば学部を作れる リーの『学院』 では学問

らしい。

見向きされずにないがしろにされて来た学者達の努力と根気の塊が あの『ごちゃまぜ普通科』であるらしい。

しかし、 何故、 科学科なんか出来るようになったんだ?」

学部を作りあげ、 新しく科学学部や機工学部や物理学部、 時眉唾物とされていた科学という学問を飛躍的に向上させてな。 確固たる地位を与えたらしい」 何十年も昔にある男がこのセフィールド学術院にやって来て、 新技術をぽんぽん生み出して、 化学部、 生物学、自然科学 作りあげた学部に 当

その。 貴族から支援の申し出が飛躍的に上がり、セフィー ルド学術院の理 事たちがとうとう重い腰を上げ、 の弟子や息子がここで働き、新技術を色々発表したおかげで商館や 科学の父』と呼ばれる男はもう死んでしまったそうだが、 新学科増設に至ったらしい。 そ

ずの奇人・変人ぶりらしくてな。 まで被害が及ぶと苦情が多数発生するそうでな、 て別の場所に押し込んどけ』 まあ、 あとは科学なんぞにのめり込む学者は魔導師に負けず劣ら と理事たちも考えたそうじゃ 実験のたびに他の学部の教室に 7 危ない物 は纏め

:

うが正しい気がするのはなぜだろう? アヴィリスは微妙な顔で口を引き結ぶ。 何となく、 後者の理屈のほ

魔導師に負けず劣らずの、奇人.....

窓の外から何かの建物を建設している現場が見えた。

おそらく、 あそこが奇人・変人ぞろいの科学科の校舎になるのだろ

ちょっと、 る『科学』 というものを。 見てみたい気がする。 魔導師並みの奇人・変人が研究す

「『学研』か」

ぽつり、 と呟いたアヴィリスにロッジはくすりと微笑む。

「行けるのか?」「行ってみたいか?」

問い返すとロッジは老獪な笑みを浮かべた。

はないからの」 入っ てしまえばこっちのもの。 特に入場制限がされているわけで

ィールド学術院の行事にも詳しいらしい。 王立学院図書館魔導階の牢名主もとい大常連のロッジ爺さんはセフ

アヴィリスはくすくす笑うロッジ爺さんの手招きに応じる。

未知の知識は蜜の味。

そして、 蜜をたっぷり含む花には棘がある事に人は気づかない。

書』階に伝わり、 魔導階での噂話は魔導書を通じて『一級魔導書』 そして、 『禁制魔導書』 達に伝わる。 階。 級危険魔導

それは、 まるで木の根が吸い上げた水が、 木の幹を木の葉を潤すさ

まに似ている。

近頃の『 禁制魔導書』 達の話題はもっぱら新設される科学科につい

だ。 海千 酸いも甘いも見知って来た魔導書にとって、 面白い娯楽

くそりゃあ、 くとうとう、 支援者が多額の寄付をしたからなあ ^ 科学科が新設される事になったんだねえ ^

かろう > <魔導の様に才と魔力がなくとも使える技術じゃからな。 くそれに、 あそこの活躍は近頃めまぐるしい > 需要も多

ざわざわと騒ぐ魔導書達をユーリはいつもの定位置で聞いていた。

< < ああ、 しかし、 聞いたぞゝ そうなると魔導科の者たちは面白くなかろうなあゝ

くそりゃあ、 < 魔導科の教授陣は随分不満らしいね > 支援者の取り合いになるからだろう^

しねえ > <魔導科に支援していた商館がいくつか科学科に乗り換えたらしい

< そのせいで魔導科の占術学部の予算が削られるとヴォルヴァ 助教

授が嘆いていたな ^

구 モイラ・ いつもヴェー リの脳裏に神経質そうでどこか儚げな女魔導師の姿が浮かぶ。 セロス゠ノルン・ヴィ・ヴォルヴァ。 ル越しでしか人と接触しない変わった教師だと有名な

女 性。

こか夢見がちな喋り方といい、 図書館で何度か出会った事があるが、 たと思う。 神秘的さより不審さが目立つ女性だ ヴェー ル越しの姿とい

想のほうが当たるって地元の農家では有名だぞ^ < 的中率に個人差がある占術学より、 普通科の自然科学部の天気予

<占術学部の天気予想料は高いしねえ >

<ありゃあ、ぼったくりだろう >

な > < ヴォ く自然科学部の天気予想はその点、 ルヴァも占術魔導師としては二流もいいところだしゝ 安いから外れても腹は立たんし

俗な学問を取り上げるなんて、 ているのが目に浮かぶ!!> くくくつ、 今頃ヴォルヴァが『 信じられませんわッ わたくしの神聖な占術学よりこんな !』って言っ

<当てる事も出来ないくせによくもまあ>

ルー枚千ソールの安物だぞ ^ < あいつ、 外では神秘的っぽくヴェール被ってるけど、 あのヴェー

読んで笑ってるような奴だし^ くそうそう、 いつもはおつまみと安い麦酒と葡萄酒片手に漫画雑誌

てた> < あ、 <雑誌の恋占いマジで読み込んでたしなあ 婚期相当気にしてて、 恋愛運が上がるとかいう石っころ買っ

それっ て半年くらい前に普通科では流行った、 うっさんくさいア

ピンクの石もチェーンもハートマークのペンダントで、 古されている手口の胡散臭い恋愛グッズが普通科で流行った。 半年くらい前、 マイが持っているのを見て、 『恋が叶うペンダント』 軽く引いた覚えがある。 とかいう半世紀前から使い セリー ズや

<うわあ>

が一様にドン引いた。 구 リが 9 恋が叶うペンダント』のデザインを伝えると、 魔導書達

ではないわ~ <いや、自分の星命を読み解けんような占術魔導師など占術魔導師<そこまで追い詰められていることを哀れむべきか?>

怒りを顕にするのは占術魔導系の魔導書たちだ。 記された魔導を学ぶ魔導師には手厳しい。 一流の魔導師から作られた魔導書たる彼らに妥協はない。 特に己に

斐なさは哀れむべきではないか? > くだが、 仮にも占術魔導を修めていながら、 市販の占いに頼る不甲

< 魔導師としても、 女としても崖っぷちっという事だろうなゝ

< 前回の魔導学会の評価が低かっ たらしいしなあ >

あんた達。 いつも、 ものっすごい失礼だよね。 魔導師に対して」

オルヴァ 他の魔導書たちは何となく人事のようで、 の話題に飽きてきたようだ。 いまいち面白みのないヴ

魔導階の魔導師たちと同じく、 どの学部が科学科に入るか、 議論し

入りだろうゝ < やっぱり、 科学学部、 化学学部と自然科学部と機工学部は科学科

<物理と生物、植物学部はどうだ?>

目的なだけではないからなゝ くあれは、半年前にポシャッただろう。 < 生物学部を医療科に移す話はどうなっ た? > 奴らの研究は医療転用が

託しているらしいからな > < 物理学部は科学科入りだろう。 化学学部と物理学部の教授陣が結

< 何で? >

< 物理学部は化学学部と結託して金持ちの支援者を抱き込んでるら いぞ >

うわぁ.....

思わずユーリは一歩下がる。

知らない方が良かった学内裏事情の予期せぬ大暴露に身が縮む。

しかし、 何をとち狂ったか、 アレを慕う学生がいるのは驚きだなゝ

タに話しこんでいるようだ。 一方、占術魔導系の魔導書達は引き続きヴォルヴァ助教授の事をネ

< 自分の能力に先が見えだしてたような奴らだがな >

< 授業についていけずに、 絶望し始めた奴らとかなゝ

それって、 なんか犯罪の匂いがするんだけど.....」

の神秘を知りなさい。 <自信を無くした奴らにヴォルヴァ さすれば、 あなたの運命も開けます』 がいう事は 7 わたくしと共に星 だ>

(胡散臭っ)

エセ宗教の教祖の言葉の様だ。

これで金を巻き上げていたら、 立派な霊感商法だ。

そして、ユーリの嫌な予感はあっさり的中した。

事がある <馬鹿高 い自筆の魔導書を何人かの生徒に買わせていたのを聞いた >

< 俺は一個五百ソー ルの占星盤を五千ソー ルで生徒に売ってい たと

「それ、本当に悪徳商

>

て犯罪者じゃ 本当に悪徳商法じゃ んか!!」 ん ! あの先生ダメなだけじゃなく

つ < てるって聞いた事が..... 植物学部は科学科に入るために教授陣に金色のお菓子を渡して回 >

「こっちは賄賂!?」

合成をしてるらしいぞ?> くそれがどうした。 魔導科の錬金学部の奴らはたまにこっそり金の

け 何してん 金の偽造も犯罪です!! ? の ! ? 犯罪に足突っ込んで純粋な生徒に何を教えてるわ てゆーか!! うちの学校の先生達は

< 何を言う、 禁忌を恐れていたら魔導なんぞやっていけんぞゝ

まともな思考を求めるのが間違ってるんじゃないか?^ <科学なんて眉唾物とされていた学問を研究し続けて来た人間に、

先生方がやってる事しょぼいから!! ために自分達の研究悪用してるから!!」 正論っぽく聞こえるけど。 あんた達の言う事が正しいなら、 全員死ぬほど俗っぽい事の

< 自分が研究した事を自分のために使わなかったら何に使うんだ?^

いうありがたぁいお言葉をお忘れですか!?」 魔導は万物のために在る』、 7 科学は大衆のために在れ』 って

術でツケをチャラにしてたし ^ くそれ はそれ、 これはこれっていうか。 俺を作った魔導師は幻

<ワシを作った魔導師は借金踏み倒すためにワシを作ったぞ?>

俗っぽ つーか、 あんたらのご主人様犯罪者じゃ

< どんな立派な研究も金次第ってことだ >

作られた魔導書なんだよね!? ! ? あんた達、 地位とか名声とかカッコイイ理由じゃないわけ 一応一流のそれも歴史に名を残すほど偉大な魔導師に そんな魔導書が作られた理由が金 ?

< 地位と名声で腹は膨れんだろう ^

応爵位はあるが貧乏で、 まあ。 そうなんだけど ここでバイトをしているユーリに反論の

を諭されるのは、 しかし、非現実的な存在の『禁制魔導書』しようがない。 微妙に納得がいかない。 気がする。 達から現実的な金銭事情

< 予算を削られまいとどの学科も学部も必死だろうよ > < 新学科設立、という事は予算の分配率が大きく変わるからな > < とにかく、今頃学院本部は大荒れだと思うぞ >

授陣の論議が紛糾しているのだろう。 学術院本部を見やる。 セフィー ルド学術院の学び舎を守るように立ちはだかる城壁のよう な『学院』本部校舎の大ホールでは今頃、 の北、セフィールド学術院の正門に入ってすぐにあるセフィールド ワイワイ騒ぐ魔導書達の声を聞きながら、ユーリは王立学院図書館 理事や各学科・学部の教

(何も起こらなければいいんだけど.....)

1Pいま話題の例のアレ (後書き)

目がゆるいので魔導師たちは博打を打ちまくりです。 心 王立学院図書館内での賭博行為は禁止ですが、 近頃司書達の

博打打ってる魔導師達も実力ある魔導師のはずなのですが.....。

2P妥協を覚えて人は大人になる

しゃるというの!?」

き渡る。 甲高いヒステリックな声がすり鉢状にイスと机が並ぶ、 会議場に響

議場。 ここはセフィ ルド学術院の本部である、 『学院本部』校舎の大会

セフィ フィールド学術院の" のがこの建物であり、 ルド学術院の唯一の出入り口たる大正門からすぐに見える 要"たる建物である。 セフィールド学術院の運営と発展を司る、 セ

院の理事・教授が全員勢ぞろいしていた。 学院本部』校舎の一番大きな大会議場にいま、 セフィ ルド学術

美女が一人。 すり鉢状になっている議場を見回し、 窮屈そうに溜息をつく金髪の

(ほぉんと、暑苦しい事....)

エリアー ゼはエメラルドのような瞳を伏せた。

そのため、 なれば話が違う。 理事・教授が全員勢ぞろいする事はほとんど無いが、 『王立学院図書館管理責任者』 としてエリアー 新学科設立と ゼもこの

大会議場の末席にいた。

調整と予算分配について』 今日の議題は『科学科の設立にあたって、 科学科に加入する学部の

議場は始めから大荒れ模様だったが、 魔導科占術魔導学部のヴォ ル

ヴァ助教授の発言でさらに状況は悪化した。

- 貴殿 我らの研究を侮辱するつもりか!!」
- 万人に平等に知識を与える』 貴女のその発言はセフィールド学術院の『全ての学問を受け入れ、 という理念に反する!!」
- 「学問に高尚も低俗もないはず!!」
- · 今すぐ撤回と謝罪を求める!!」

陣。 轟轟と批難の声を上げたのは科学科への加入が決まった学部の教授

白い白衣の集団に迎え撃つのは魔導科の魔導師たちだ。

- らも本意ではない」 しかし、 貴方方の学問のせいで我々の研究が妨げられるのはこち
- そちらも知っているはず」 ヴォルヴァの発言は確かに問題だったが、 我らの学問の高尚性は
- 「謝罪の必要はないと思うがな」
- の『負け犬の遠吠え』と考えさせてもらってい それは、 我々の学問に膝を屈するような成果しか出せない貴殿ら いか?」
- ない学問を誰が学ぶ!?」 「高尚? はっ!!笑わせる。 魔力が無い万人に伝える事の出来
- 「間違いを認められない者は愚者にも劣る!!
- [゛]貴様ら!!我々を侮辱するか!!」
- 魔導の深淵を知らぬ凡人に我らの学問を知る知能もないようだな」
- 貴方方の学問こそ、 この『学院』 には不要だ!
- 「何を!!」
- そちらこそ、何を言う!!」

(ああ、五月蠅い.....)

問の正当性を語り、 白衣の科学科の教授陣と魔導科の教授陣が総立ちで轟轟と自分の学 相手の学問を詰る。

差ない。 真面目な言葉を使うと堅苦しいが、簡単にいえば子供の口喧嘩と大

ちゃの自慢合戦をしていた姿を思い出す。 エリアーゼは自分の息子が学院内の託児所で、 お友達と自分のおも

さいね? (お願いですから、 貴方方の精神年齢を疑ってしまいます) お前の母ちゃんでーベーそーとか言わないで下

ていく。 それを危惧したくなるくらい彼らの論争はどんどんレベルが低下し

いている理事や他の教授達がげんなりし始めたころ、

 \neg 静粛に 両陣! それ以上口論をするならば出て行きなさ

歳ほどの貴婦人がピンッと背を伸ばして立ち上がり、 科の教授達を睨みつけていた。 真っ白な白髪を緩やかに結いあげ、 すり鉢の一番奥から張りのある鋭い女性の声が響く。 深い海の様に青い瞳を持つ五十 科学科と魔導

、ソフィア学院長」

両陣の誰かが眦を吊りあげる老貴婦人をそう呼んだ。

老貴婦人は真っ直ぐな目で各学科の長を呼ぶ。「魔導科教授長、科学科教授長」

貴方達 方達を『教授長』 の口論が貴方方の学科に有益なものでしたか? の学問をより発展させるにふさわし に任命したのですよ?」 l1 人物であると思い、 私は貴方方が

ませる。 おごそかな老貴婦人の言葉に、 両陣の長達は恥いったように身を竦

責任は魔導科教授長のドレイツ教授に任せます」 わかったのなら、 席に着きなさい。 ヴォ ルヴァ 助教授の発言の

「わたくしは!!」

わからないのなら.....」 黙りなさい!! どんな学問にも貴賎はありません!! それが

々席に着く。 ソフィアの脅すような視線を受けたヴォルヴァは唇を引き結んで渋

大人しく両陣の教授達が着席した事を見計らい、 三つ揃いの貴族の礼服姿の壮年の男性を見やる。 ソフィアはすっと

「議長。議題の進行をお願いします」

「は、はい!!」

(やっと話が進みそうですね)

そう思ったのもつかの間、

では、 この予算案の通り魔導科の予算を10%カッ

「いや!!納得いかん!!」

魔導科の教授陣が立ち上がり、 我々から削られた予算を科学科なんぞに使われてたまるか

なんだと!?」

科学科がいっせい 予算を削られてしまうのは、 に迎え撃った。 貴様らの怠惰が原因だろう!

いぎゃ ſĺ わいわいといつまでたっても進行しない議題と状況

そして、 にエリアー すっと学院長の席を見、 ゼは溜息をつく。 耳をふさぐ。

い加減にしなさああああああい

声を吐き出した。 般若のような形相のソフィ ア学院長が 学院』 中に響き渡るような

まったく! !どいつもこいつも!!」

まあまあ。 学院長、気を落ちつけてください」

鼻息も荒く執務机に腰かけたソフィア学院長をエリアー ゼはいつも

の微笑みでなだめる。

時に教授達に意見を求め、 もう一度話し合う事になった。 で予算案と科学科加入学部の調整は理事たちの協議 一向に進まない議論に、堪忍袋の緒が切れたソフィア学院長の提案 明確な理由の下での異議申し立てのみを の後、 最終決定

たわけですし」 無駄と知ったようですし、 まあ、 今回の件で理事たちも教授達だけで話し合いをさせるのは 最終的に教授達も学院長の提案を承諾し

達よ」 「承諾したのは理事たちと騎士科・医療科・芸術科と普通科の教授

多数決の結果を思い出したのか、 エリアー ゼが淹れた紅茶をソフィ

アは苦々しげに口に含む。

応接用のソファに腰掛けることを勧められたエリアー をすする。 ゼも静かに茶

鼻息も荒くソフィアが吐き捨てる。 みんないい年して自分の我を通す事しか考えてない んだから!

来たという事でしょう?」 ですが、 それだけ教授方は妥協せずに自分の学問を修め、 高めて

エリアーゼが諭す言葉にソフィアはケッとそっぽを向いた。

ものね」 「そうね。 我を貫き通す子供がそのままデカくなったような奴らだ

肉っているのだろう。 口論の最中、 彼らの言葉のレベルがどんどん低下していった事を皮

ソフィアはげんなりした顔をふってエリアーゼに向き直る。

の採用を支持していただいたおかげでわたしの苦労も減りましたわ はい。 あの人たちの事はもうい 工事のほうももう終わりましたし、 いわっ それより、 副館長にクライヴ司書 図書館はどう?

にっこりと微笑んだエリアーゼからソフィアは少し視線を逸らす。

たわ」 レイヴン副館長の事は、 御免なさい。 こちらの配慮が足りなかっ

را ا 「いいええ~。 あの件のおかげで、 無能な理事も一掃できましたし

「.....そうね」

三ヶ月前の王立学院図書館での魔導書の暴走・放火事件は世間に大 々的に報じられた。 にこにこと微笑むエリアーゼを前にソフィアも負けじと微笑む。

ただの図書館ならば市民の反感も薄かったかもしれないが、 ザラー

う立場でありながら事件に加担したとして市民の猛烈な非難を浴び る事になった。 特に副館長であったレイヴンは王立学院図書館の管理者の補佐とい 魔導師二人と同じく共犯者の司書と副館長も槍玉に挙げられた。 ト王国の管理下にある『王立』 の図書館を傷つけたとして、 の

なった。 副館長にレイヴンを押した理事、 を組んだ理事たちによって仕組まれたものであるという事がわかり、 調べてみると、 当時のエリアー ゼの王都行きもレイヴンと、 加担した理事達も一掃される事に 彼と手

事の発端は事件を起こした奴らだろうが、 に暗躍したのはエリアー ゼであることくらいソフィアも気づいてい (図書館の管理人にしておくにはもったいない女狐だこと) 後に起こった『大掃除』

それに、 エリアーゼのしようとした事に少々加担した自覚はある。

界の宝ですもの」 大事ないならそれでい 61 တွ あそこはこの国の..... しし いえ、 世

「はい。心得ています」

浮かべた。 こくりと頷いたエリアーゼにソフィアはようやくほっとした笑みを

科学系の専門書の増加は進んでいるかしら?」

「ええ、いま急ピッチで最終調整中ですわ」

「そう」 類に目を通す。 とソフィアはそっけなく言い、 エリアー ゼが差し出した書

「今回の『学研』荒れるでしょうねえ」

「そうね」

事達と決めた取り決めを思い出す。 エリアーゼがぽつりとつぶやいた言葉に、 ソフィアは溜息と共に理

で加入学生が多かった学部へ予算を優先的に配慮する』 学研』 での研究発表内容を審議し、 その後に行われる学部申請

学研』 で何かが起これば即生徒の身に危険が及びます」

魔導科と科学科がお互いに何か仕掛けなければいいですけど...

「ええ、ですから、騎士科の教授とこれから会合です」

類を返す。 心底辟易した様子でソフィア学院長は溜息をつき、エリアー

書類の確認をしたエリアーゼはすっと背筋を伸ばした。

「では、わたしは失礼させていただきます」

、ええ、これからも図書館をよろしく」

エリアーゼ殿」

学院長室を出たエリアー ゼは呼び止められて振り向く。

「まあ、オストロ教授」

エリアーゼの視線の先に鳶色の瞳と髪を持つ、 厳しい顔立ちの男性

が立っていた。

白いクラヴァット に明るい栗色の三つ揃いの礼服を纏う様は典型的

な貴族の成り立ち。

. 学院長は中にいるか?」

貴族らしい尊大な口調にエリアーゼはにこりと愛想笑いを零す。

科の教授とお話があるそうですけれど?」 「ええ、 オストロ教授はどうしてここに? これから学院長は騎士

「何故、だと?」

異様な事を聞 オストロ教授 いたかのようにエリアーゼを見下ろす。 アルカス・カリスト= アルス ・オル オストロは

貴殿は魔導科が侮辱されたというのに何も思わない

_

彼もまた、魔導崇拝思想の持ち主だ。

大会議場での一件が気に食わなくて抗議に来た のだろう。

教授方の崇高な議論には口を出せませんわぁ」 「申し訳ありません。 わたしは一介の図書館の管理人ですから、

にっこりと微笑んだエリアーゼ。

ったが、 背中に聞きながら、 エリアー ゼは優雅に一礼するとオストロが学院長室の扉を叩く音を ユーリが見たら『イラッとしてる!!』と震えあがるような笑顔だ オストロはふんっと鼻を鳴らしてエリアーゼを見下ろす。 その場を去る。

た掲示板を見た。 『学院本部』から出たエリアーゼは『学院本部』 の中庭側に置かれ

掲示板には、各学科の『学研』 案内が貼られている。

え、 セフィー ルド学術院の生徒達が一生懸命学んだ事学んで 知ってもらい、 共に学ぶ仲間を増やす為に行われるのが『学研』 いる事を伝

(大人達の下らない自尊心のためではないでしょうに)

ソフィア学院長は『学研』 事が気に入らない。 を予算分配のための篩がわりに使われる

大人の事情で踏みにじられるのは我慢ならない。

エリアーゼは母として、

一個の

人間として、

若者の伸びやかな芽が

(どうか、無事に.....)

楽しそうに『学研』 リアー ゼはそっと祈っ の発表内容を話し合う生徒達の横を歩きながら た。

3 P 図書館司書達の苦闘

高い天井にざわざわと話し声が反響する。

だだっ広い倉庫のような部屋の中、 隔に机といすが配置されている。 ぽつりぽつりと小島の様に等間

その小島の間を縫う様に配送用のカートを本でいっぱいにした司書 達が走り回っていた。

もいた。 司書達が慌ただしく働く中、 ぽつりと浮かぶ小島のひとつにユー IJ

題名『重力と物質の移動』著者サー・フィーア・タマーヒル アイザック」

っ い 、 ユーリが読み上げた本の題名をオリアナが紙に書き記す。 チェック。 専門階二階の7番書架のSの4」

棚に入れた。 ユーリは読み上げた本を『専門階二階7番書架・S4』と書かれた

オリアナが作業する机の側には木で出来た箱があり、 その中には本

その箱からユーリは本を取り出す。がびっしり詰まっている。

題名『天動説の矛盾・ 地動説の概念』 著者ニコラス・コペルニ

クス」

はい。 チェッ ク 専門階三階の5番書架のE8

階5番書架のE8』 オリアナの指示を受けてユーリは題名を読み上げた本を『専門階三 と書かれた棚に入れる。

瓦の広間』 ここは専門階のバッ ク ヤ ド。 専門階の中で最も広い、 通称 赤煉

昔々は壁一面が美しい赤煉瓦に覆われていたらしいが、 に埋もれて昔の姿は想像できない。 今では本棚

屋の中を走り回る司書達のせいで少し手狭に見える。 そして、 昔々は専門階で最も広い部屋と言われていたが、 61 まは部

って!!」 シーズ! とりあえず専門階一階の一番にこの棚の本持っ てい

これは専門階二階の本だって言っただろうが!! ネロ

「すいません!! ロランさん!!」

「専門階三階の4番書架に行ける奴いる!?」

「ロゼの補佐、にマリー!!行ってくれ!!」

ナサリー ここの棚の本専門階三階の6番書架に持って行っ

送カートを押して動き回る司書達で活気づいている。 部屋の中は埃除けの紺のエプロンを纏い、トランシー バー片手に配

と、いうより、みんな少々ヤケクソ気味だ。

今現在、 し準備。 『赤煉瓦の広間』 で司書達が行っているのは図書の貸し出

貸し出し準備を受けている図書は科学系の図書ばかり。

なった。 ある王立学院図書館では新しい学科のために図書の補充を行う事に セフィールド学術院の新学科設立と共に、 セフィ ルド学術院内に

その計画は半年前から行われていたはずなのだが.....。

ロランが額から流れる汗をぬぐう。 くっ あのダメ眼鏡!! 仕事すらしていなかっ たのかよ

ロラン やめて、 の声を聞いたキー ロラン! ! リスがペンを握り潰さんばかりに叫ぶ。 やる気が失せるでしょう!?

だが、皆言いたい事はロランと同じらしい。

半年前から計画的に行われていたはずの図書の補充は三ヶ月前に免 職処分になったレイヴンの怠慢で一向に進んでいなかった。 おらず、そのしわ寄せがこうして司書達に襲いかかっている。 いうより、 レイヴンが担当するはずの仕事のみが一向に進んで

ギズー ノンさんとクライヴさんも死にそうな顔で仕事してました

という生真面目な学者風の青年。 新しく副館長になったのは、 クラ イヴ・リー ゾ・ セロ・リュネッ

いた人だ。 いままではギズーノンの補佐をしながら専門階の管理責任者をし 7

室は立ち入り禁止状態になっている。 『赤煉瓦の広間』の隣にある『鴉の部屋』 と呼ばれる専門階の管理

理由は、その部屋で働いているギズー ノンとクライヴが悪鬼になっ ているから。

うっかり入室したら最後、 八つ当たりに何をさせられるかわからな

特に、 恐ろしい。 クライヴはここ三ヶ月まともに家に帰ってい ないというから

ここに集められた司書達もここ二ヶ月間残業続きで、 レーションが溜まっている。 かなりフラス

い加減に休み貰わないと彼女に振られる

泣かれるわ が遅いせい じゃ ない、 で同居中のお義母さんに白い目で見られるわ、 彼女くらいまた作れば。 あたしなんか近頃帰り 息子には

今日は早上がりしていいわよ、サーリ

ぎりぎりとペンを締め上げて嘆く褐色の肌の女性をリリー

学院』 しみを誰よりもわかっているのだろう。 に通う子供を三人も持つ母であるリリー ズは既婚女性の苦

かれちゃった.....」 この前、子供に『お母さんはわたしより本が大事なの?』 つ て聞

同じく既婚女性司書が集まって愚痴がぽつり、 『お母さんのシチュー が食べたい』 って言われた ぽつりとこぼれる。

俺も子供に顔を忘れられそうだ」

お前んち、ガキ生まれたばっかだっけ?」

俺が家に帰るともう子供は寝てるんだよ」

切ないな~。 お父さんは」

男性司書も色々あるらしい。

せて下さい.....」 切なかろうと、 家庭内不和が起ころうと、 今日の ノルマは終わら

声の主は片眼鏡をかけた、ひょろりと-司書達の愚痴に細い声がを割って入る。

ひょろりとした細長い青年。

クライヴ

ロランが引き攣った顔でよろよろと『赤煉瓦の広間』 に入って来た

青年を見る。

纏わりつかせている。 藁色の髪はぼさぼさ、 顔は不健康な感じに痩せこけ、 シャツもズボンもよれよれで、 いつもはきちんと整えられてい 体中に悪雲を

生真面目な学者風の印象があり、 りようにユーリも息を飲む。 いつも清潔な感じのクライヴの変

次に配送される図書で補充は終わりますから..

様だ。 ふふふふ…… と低く笑う姿は墓場から起き出したばかり の吸血鬼の

「ぎ、ギズーノン爺さんはどうした?」

ようで、 「ああ、 さすがに、あのお年でこの過密スケジュー いま隣の部屋で休んでもらっています.....」 ルはきつかった

医療科併設の病院に!!」 「誰か!! 『鴉の部屋』 に行ってくれ!! ギズー ノン爺さんを

ロランがトランシー バー に向かっ て怒鳴る。

おそらく、ギズーノンは『鴉の部屋』 で倒れているのだろう。

「ギズーノンさん!!」

「行かないで下さいね?」

思わず駈け出しかけた司書達の前にクライヴがゾンビの様にたちふ さがる。

仕事を完遂させてください」 「ギズーノンさんは応援の司書達に任せましょう。 それよりも、

そう、 とクライヴは『鴉の部屋』のほうを見て言う。

不吉な言い方すんな! ギズーノンさんの尊い犠牲を無駄にしないためにも.

ギズーノンは確かに『鴉の部屋』で倒れていたため、 応援の司書達からの報告を受けたロランが思わず吼える。 れて行くが、 命に別状はないらしい。 一応病院に連

クライヴさん。 ところで、 次に配送されてくる図書は何部ある

実に戻される。 ロランの報告にほっとしていたユーリはオリアナの言葉でハッ

司書達の悲壮な視線を受けたクライヴはふっと微笑む。

「あと、二十万部です」

「にじゅっ!?」

記録して、レファレンス用の資料を作って、棚に陳列する。 あるのに、 まだまだ、 傷がつかないように防護処理して、"紋"を押して、題名を登録 さらにあと二十万部も増えるというのか。 まだまだ、 まだまだ残っている貸し出し準備中の図書が

ぽんっとロランが「彼女に振られる」発言をした司書の肩を叩く。 ガイと呼ばれた青年はロランの腕を払ってきいっと叫ぶ。 ガイ、 人事だと思って!!」 悪い。 彼女に振られてくれ」

あの、 ゾンビが動いてるみたいで、 まあまあ、 クライヴさんも病院行って欲しいんですけど.....」 いまから僕もこちらの仕事を手伝いますから.. 怖いぞ。 お前」

溜息をつく。 ふふふ~、そうですかあ?と微笑むクライヴにキー リスとロランが

音だ。 さぼっていたら、 その様子を見た司書達は、 何だかクライヴに呪われそうで怖くなったのが本 諦め顔で仕事を始めた。

またプラス二十万部。

い図書がまだまだまだまだ残っているのに、

工程としては単純だが、七面倒臭いこれらの作業をしないといけな

はい 구 Ń この棚の本を専門階二階の7番書架に持っ て行って」

ユーリは配送用 『専門階二階』・ 『赤煉瓦の広間』 トが作りつけられている。 のカー の唯一赤煉瓦が見える場所には『 『専門階三階』 トに図書を詰め 『専門階四階』 て『赤煉瓦の広間』 専門階一階』 と書かれたプレ を横切 る。

間の継ぎ目に差し込む。 구 リは『専門階二階』 と書かれたプレー トを外し、 煉瓦と煉瓦 の

押しながら煉瓦の中に入っていく。 継ぎ目に吸い込まれていくプレーと共にユーリも配送用のカ

ユーリを出迎える。 合う蔦の様に本棚と本棚を繋ぐ渡り廊下が印象的な専門階の光景が 巨大な木々で出来た森の様に乱立する巨大な本棚と木々に絡みつき

ち入りを禁止している。 専門階は今回の図書の補充を機に『特別調整期間』 いつもと違うのは専門階を利用する市民の姿が見えない事。 として市民の立

通常業務と図書の補充を同時進行出来ないと判断したクライヴがエ 休館措置の期限は明後日まで。 リアーゼ館長に嘆願して実現した専門階のみの休館措置だが、 その

絶対終わらないし.....)

急収集された時点で嫌な予感はしていたのだが、 本来は魔導階で働いている予定だったユーリがいきなり専門階に 配送カートを押しながら、 ているとは思いもしなかった。 ユーリはがっくりとうなだれる。 ここまで切羽詰ま

魔導階は大丈夫かなあ.....)

魔導階で働 く主要メンバー も専門階に来てい るため、 多分、 魔導階

に戻っ たら業務がてんこ盛りになっているだろう。

(う、 帰りたくなくなってきた

しかし、 この専門階の仕事もいい加減疲れてきた。

早いところ終わらせて通常業務に戻りたいのも本音だし、 より、魔導階の風紀の乱れが心配だ。 それに何

魔導階に不慣れな司書達がてんてこ舞いで働いていれば、 自然魔導

師達への監視は甘くなる。

達を止めるのも司書の仕事だし、それを肴に賭博行為を行う魔導師わざと壁際の『囮の魔導書』を開いて隠し部屋に行こうする魔導師 達を諌めるのも司書の仕事。 知識に貪欲なのはわかるが、 王立学院図書館の魔導を調べるために、

魔導師ってまともな事する人いないのっ!?)

導師と名のつく者達はロクな事をしていない気がする。 禁制魔導書』を作った魔導師といい、ここの魔導師達とい

「うう、 まともな魔導師って、どこにいるのかなあ

はぁ、と深刻な溜息をついたユーリは黙々と本を本棚に移す。

魔導階で厄介な事が起きていない 事を祈りつつ。

年若い魔導師が魔導階のカウンター で魔導書の返却を行っている。

はい、 これ」

はい。 返却の魔導書ですね」

「 あ、 あと、予約した魔導書って帰って来てる?」

はい。 少々お待ち下さい.....」

それを受け取った女性司書はカウンターに魔導書を置き、 確認作業

のために立ち上がる。

検索を頼んだ魔導書はどうなっている? 11 つまで待たせ

るつもりだ!?」

そこに、もう一人の魔導師がやって来た。

は、はい!!すいません!!」

威圧感のある魔導師に魔導階での業務に慣れていない女性司書はす

くみ上がる。

毒そうに見やると、そうっとカウンターから離れる。 おびえて慌ただしく動き回る女性司書を見て、 年若い魔導師は気の

あっちの談話室で待ってるから」

っ は い。 すいません。ショワナール魔導師!!」

司書は年若い魔導師を見送って慌ただしくカウンター イライラとした様子でカウンター にいる魔導師が怖かっ たからだろ から離れる。

う、せかせかと走る姿は逃げるよう。

それを見送った魔導師は、 ふと カウンター に残っている魔導書を

見つけた。

カウンターには誰もいない。

カウンターを見ていない。

구 リの願いは、 の種が、 ぱかりと芽を出した。 残念ながら誰にも何にも届かなかった。

ル ツ ル

その日、 専門階は異様なほど人が集まってい た。

「え~と、科学学部のフランシウムさん。 a 物質の燃焼変化論』 لح

『熱力学法則論』」

る性質変化について』」 化学部のルーベンさん。 \neg 結晶構造学』 と『物質の状況変化によ

「物理学部のマルコムさん。 『力学基礎概論』

自然科学部のクリスティー ナさん『気象変化の科学』

まっていた。 専門階のカウンター には科学科に加入予定の学部の生徒や教授が集

たらしい。 リリー ズの話によると図書館開館二時間前から長蛇の列が出来てい

彼らの目当てはもちろん、 司書達が残業し続けて貸し出し準備をし

た科学系の専門図書。

でいる。 皆、自分の目当ての図書のリストを作ってカウンター で検索を頼ん

ユーリも司書の一人として専門階にいた。

くも後悔し始めていた。 のだが、 今日はヘルプで入ったのではなく、 働き始めて一時間、 誰かに代わってもらえば良かったと早 ただ単に専門階で働く日だった

貸出上限ぎりぎりまで本を借りていく利用者ばかりなので、 は配送用のカートを片手に専門階の歩くだけで足が震えそうな渡り 廊下を足早に進む。 トランシーバーからはひっきりなしに検索図書の名前があげられる。 ユーリ

「ありがと!! リスさん。 次、このリストの図書の検索よろしく!!」 ネルソン教授の図書持ってきました!!

バックヤードを通って専門階一階の中央カウンター についたユーリ

は、最初より長くなった列に眩暈を覚える。

時間の経過と共に列は長くなっている気がする。

司書に探してもらった方が安全だし、 ってくる。 まで待機している人を見ると「自分で探してくれ」と言いたくもな 早いし、 無駄がないが、

ます」 キーリスに渡されたリストを読み上げたユー 「この『分子構造論』 と『科学の父の遺産』 はもう貸し出しされて リは溜息をつく。

「嘘だろっ 俺、 開館三時間前に並んだのに!

その声が聞こえたらしい、 て嘆いた。 金髪の少年が勝気そうな榛の目を見開 ίī

しておきますか?」 借りたのはロレンス教授みたいね。 とりあえず、貸し出し予約

却されてくるのを指をくわえて待たないといけなくなる。 時間の経過とともにめぼしい本はどんどん借り出されてしまい、 キーリスが問うと、 その少年は項垂れながらもこくりと頷 61 返

に向き直る。 しょんぼりと予約申請書にサインする少年を見、 ユーリはキ

取ってきます」 リストに残っ ている三つの本はまだ貸し出しされてい ない

ユーリ。 ついでにこのリストもよろしく

「はあい!!」

の司書から渡されたリストも追加して、 を押した。 구 リはヤケクソ気味に

おい!! 待ってくれ!!」

みに纏めた少女が真っ直ぐに濃い青の目を向けて駆け寄ってくる。 専門階の二階の廊下を足早に進むユー リの背に高い声がかかっ いささかイラッとしながら振り返ると、亜麻色の髪を一本の三つ編

は? その『植物変化論』を譲ってくれないか!?」

勝りな言葉。 可憐な容姿とは裏腹に、 亜麻色の髪の少女の口から出てきたのは男

ニュアルを思い出す。 一瞬虚を突かれたユー リだが、 ハッと我に返るとこういうときのマ

ので、 申し訳ありません。 貸し出し予約申請をしていただけませんでしょうか?」 この本を待っている方がいらっ 61 ます

「 だ、 ダメか?」

恐る恐るといった様子で問う声にユーリは首を横に振る。

ますので」 申し訳ありません。 先に取り置きを申請された方がいらっ l1

マ そうか

がっくりと項垂れた姿を申し訳なく思いながら、 ドに向かう。 구 リはバッ クヤ

き集めるという事だ。 二ヶ月間、 配送カートを押しながら、 いう事は、 (このペースだと本当に科学系の図書が無くなっちゃうかも... ユーリ達が頑張って準備した図書がすべてなくなる。 一週間司書達が棚に納めてきた図書をまた走り回ってか · 구 リは深刻に考え込む。

ぞっと青褪めたユーリは、 (やばい。 マジで逃げたくなってきた..... バックヤードに戻る。

「おう。 ユーリ

ロランさん。何?それ」

抱え持つロランに出会った。 中央カウンターに向かっていると、大きな立て看板を数人の司書と

『貸し出しされた図書の一覧?』」

立て看板に貼られている紙の一番上の文を読んだユーリに、 ロラン

が応える。

じゃないと科学系以外の専門階利用者の邪魔になるからな」 こいつを専門階の外に出して、 その隣に予約申請受付を作

で借りられるんだ。 ロランの後から、男性司書が机といすを持って来ている。 「そっか、助かるよ。 しょうがないさ。 科学系の図書はやたら高いからな。 人が集まるに決まっている」 もう、こっちもいっぱいいっぱいで... それをタダ

げっそりと肩を落としたユーリの頭をロランが慰めるようにぽんぽ んと撫でる。

うやく落ち着いて仕事をする事が出来るようになった。 い) は功を奏し、カウンターの混雑はどうにか収まり、 ロランが作った立て看板 (正しくはクライヴが考え付いた作戦らし 司書達はよ

しかし、 利用者がいなくなる事はなく。

その日、 司書達は閉館時間まで休むことなく働く事になった。

「そんな事があったんですの?」

「うわぁ」

摂る約束をしていたユーリは、 を語った。 今日は授業が比較的緩やかなアリナとフィー 昨日の王立学院図書館専門階の様子 ナと共に中庭で昼食を

知らなかったよ」 専門階が混雑し てるっていのは聞いてたけど、 そこまで酷いとは

首をすくめたフィ ーナにユーリは疲れたように溜息をつ

「昨日は休日だったのも関係してると思うんだけどね」

い出す。 科学系の図書が結局ほとんどなくなってしまった専門階の本棚を思

貸し出しは一瞬だが、 か目からしょっぱい水が出そうになる。 それまでに準備にかかった時間を思うと何だ

hį どっちかっていうと、 学研』 が近いせいじゃないかな

?

「何で?」

きょとりと目を丸くしたユーリにフィーナとアリナが驚いたように

顔を見合わせる。

対立してるってすごい噂だよ」 「ユーリ、知らないの?『学研』 の成果を競って科学科と魔導科が

「うそっ!?」

思わず魔導科の生徒であるアリナを見る。

「事実だそうですわ」

こくりとアリナは頷く。

ここしばらく、 授業と図書館の業務でいっぱいいっぱいだったせい

ですっ かり学内の事に疎くなってしまったらしい。

ええつ!? そのせいで今年の『学研』 つまんない~」 は他学科の学生の入場を制限するって」

他学科と交流する場のひとつが『学研』である。 学科ごとに校舎が離れていて、 他学科との交流が少ない『学院』 で

「せっ く魔導科の魔導実践とか騎士科の演武が見れると思っ たの

ユーリが嘆くと、フィーナも同意した。

「あたしも普通科の植物学部の研究見たかったなあ~」

わたしも植物学部の新種植物には興味がありましたのに...

はぁ、 と溜息をつくアリナにフィーナが珍しそうな顔を向けた。

あるんだ」 意 外。 魔導科の生徒なのに科学科に入るかもしれない学部に興味

しては科学の発展もこの国に必要なものであると考えていますわ」 貴族出身の魔導師って、 いちいち対立しているのは一部の学部だけです。 結構魔導崇拝思考でガッチガチの人が多 わたし個人と

フィー と澄ましたように咳払いをする。 ナの歯に衣着せぬ物言いにアリナは少し顔を顰めたが、 ツン

に魔導を使うことは難しい」 れるのも難点。 魔導は確かに尊いものですわ。 そして、 現在の魔導では魔力の少ない市民が自由 しかし、 それ故に使える人が限ら

「"魔鉱石"と魔導機は高いしね」

ユーリは図書館で使うトランシーバー 型の魔導機を思い出す。

金がかかった。 『迷子の魔導書』事件で壊れてしまった魔導機の修理に恐ろしくお

されるのを知って少しばかり気の毒になった事を覚えている。 「何かの冗談か?」と思える金額が並ぶ領収証が事件の犯人達に回

市場に出回る事が少ない。 魔導機の原動力になる " 魔鉱石"は採掘できる場所が少ないうえに

その上、 上がり、 市民の手が出せないほど高価になる。 " 魔鉱石"を細工して魔導機に利用できるようにする の数も少なく、いよいよ魔導機と"魔鉱石"の価値は跳ね

四年前の戦争も"魔鉱石" 採掘場の利権を争っての戦争だっ

うかつに採掘できないのも" 高価で利用価値の高い" 魔鉱石" 魔鉱石" は戦争の火種にもなる。 の値が吊り上がる理由だろう。

が、それ以前にザラート王国を支えるエリメルバ侯爵家の人間でも う国民であるならば、 生まれてはいけないモノですわ。 定と繁栄を助けるためにも、 あり、アリナというザラート王国の民でもあります。 魔導が使える・使えない事による市民の格差は国として 魔導では補いきれない『穴』を埋め、 科学は必要と考えるでしょう? わたしは魔導師を志す若輩者です 真に国を思 国の安

た。 気負うでもなく、 ただ当然の事のように言うアリナは『貴族』 だっ

学生らしい瑞 から背負ってきた『貴族の誇り』 々しさの中にあるのは、 国を支え守る事を生まれた時

の様なポッと出の貧乏貴族では背負えない、 歴史と誇りをア

リナは背負っていた。

「本当に意外だ」

?

り返る。 生垣を背に座っていたユーリ達は生垣の向こうから聞こえた声に振

. あ.」

· 昨日の司書? 『学院』の生徒だったのか」

学術院普通科の生徒らしい。 ユーリと同じ普通科のエンブレムをつけているので、 生垣の向こうから現れたのは亜麻色の髪の少女。 セフィ

ユーリ。この方は?」

昨日専門階で会ったの」

ミーシャ・ヴェルデ。
普通科生徒だ」

手を差し出す。 威風堂々とした口調で自己紹介した亜麻色の髪の少女が、 0 구 リに

亜麻色の髪の少女、ミーシャ で司書のバイトしてるの。 あたしはユー ナとアリナを指し示す。 リ・トレス・ こっちはフィ マルグリット。 の手を握り返したユー リは隣に座るフ 普通科の生徒、 ーナとアリナ」 図書館

す。 にこっと人懐っこい笑みと共にフィーナは青のエンブレムを指し示 ーナ・ キャラウェイ。 医療科生徒。 医学部志望かな

アリナ 그 = = セイス・ヴィ エリメルバですわ。 魔導科で応用

魔導学部を志望しております」

それぞれの自己紹介が終わった後、ミーシャが少しすまなそうに眉 を寄せた。

し気になってな」 盗み聞きする気はなかったんだが、 すまない。 聞こえた内容が少

?

わけがわからず首を傾げたユーリにミーシャはふっと微笑む。

「魔導科の生徒が科学科設立をどう思っているのか、 少し気になっ

た

「ああ、なるほど」

フィー ナが頷く。

にしているとか聞いてね」 「教授や先輩方はぴりぴりしていてね。 打倒魔導科をスロー ガン

少しばかりうんざりだとミーシャは溜息をつく。

「科学科入りが微妙な学部は特に殺気立っているだろうね?」

フィーナが問うと、ミーシャは頷く。

「ねえ、 他学科なのに何でフィーナは普通科のあたしより詳しいの

?

「いま、どの学科でもこの話題で盛り上がっ ていますわ。

ろ、ユーリが知らない事に驚きなんですが.....」

゙.....すいません」

図書館業務が忙しかったんです。

リが項垂れていると、 ミーシャが軽く笑った。

ところで、 あなた達は植物学部に興味があるのか?」

ええ、 わたしは新種の花の苗を見たいと思っていましたの」

うん。あそこの新種の苗はいつも面白い」

こくんと嬉しそうに頷いたミーシャ の顔を見てユー リは問う。

「ミーシャさんは、植物学部志望?」

いいかな?」 「ミーシャでいい。 その代わり、 わたしもあなた達を名前で呼んで

ミーシャの問いに三人は首を縦に振る。

「うん、 あってね」 植物学部志望。 植物の品種改良や土壌改良技術に興味が

「なるほど」

だから、何か面白い苗が出来たら分けてあげる」 「わたしは植物学部が科学科に入らなくても植物学部に入るつもり

「いいんですの?」

嬉しいし、 わるかもしれないしね」 「うん。 貴族で魔導師なのに、 ちょっとでもこうした交流があれば、 科学を肯定してくれる人がいるのは お互いの印象が変

「ふふ、そうですわね」

(わぁ、大人だ~)

た。 同じ年なのに、ミーシャとアリナは随分視野が広く、 にっこりと微笑みあうミーシャとアリナを見てユーリはただ見とれ 対応が大人だ。

昼休憩のチャ イムが、 生徒達に等しく降り注いだ。 対立しあう教授陣に彼女の爪の垢を煎じて飲ませたい。

4Pガール・ミーツ・ガール (後書き)

反面教師って奴でしょうか?

久しぶりの投稿です。

5Pガール・ミーツ・ボーイ (前書き)

『学研』まで残り七日。普通科の校舎での一幕。

5 P ガール・ミーツ・ボーイ

色とりどりのポスターや看板。足早に駆け回る生徒や教授。

落ち着いて校舎を見回すと、 周りは『学研』 一色になっていた。

まったユーリにしてみると、 図書館業務に追われていたせいで学内の事にすっ 何だか置いてけ掘りを喰らった気分だ。 かり疎く なって

「おい!! ビーカーが足りないぞ!!」「どけどけっ!! 危ないぞ!!」

「隹ご!?」そこのフラスコ劼かした又!!「そこの媒介はもっと丁寧に扱え!!」

誰だ!? そこのフラスコ動かした奴!

議場。 わいわいがやがやと走り回る教授や生徒の集まる先は普通科の大会

そこにユー に中の喧騒を覗いている生徒達がいた。 リは足を向けると、 会議場の窓や扉にユー リと同じよう

やっぱ、科学科に転科しようかな?」

バッカ、 お前科学系の必修科目とってねえじゃん。 無理無理」

「うわあ、化学学部のあれ、なに?」

どうやら、 彼らはユー リのように今年の九月から学科生・新三年生

になる生徒達らしい。

がやがやと騒ぐ生徒の中にふと、 みを見つけた。 ユーリは見知った亜麻色の三つ編

「ミーシャ」

亜麻色の三つ編みがふわりと舞い、 濃い青の瞳がユー リを見た。

「ユーリ」

「ミーシャも見学に来たの?」

「見学.....うん。見学に来た」

明らかに野次馬である自分達を正当化する言葉に苦笑しながら、 シャは頷く。 Ξ

やっぱり、 科学系の学部の展示品は派手っぽいね」

うん。 他の学部に比べて研究結果が分かりやすいから、 パフォ

ーマンスもやり易いんだ」

「ふうん。 いな」 植物学部ってどこかな? あたしも新しい花の苗は欲

おい!!こらそこっ! 関係者以外は立ち入り禁止だぞ!

指差して怒鳴った。 背の高い厳格そうな男が会議場内でうろついている、 ある少年達を

ってくる。 「げっ!!」 やべっ」と言いながら少年達はユーリ達のほうに走

「こら待て!!」

魔導科の生徒じゃないだろうな!!

「そこ!!何を見ている!?」

少年達の進行方向にいるユーリ達にも鋭い声がかかった。

「げっ!? 逃げるぞ!!」

「え?なんかやばいの?」

わたわたと四方八方に走り出した生徒達の喧騒の中、 구 リはミー

シャの方を向いた。

長ったらしい事で有名な先生だ」 ノルド・ ウェンハイム教授は説教がねちっこくて、

と共には知る。 こちらに声をかけた眼鏡の先生を指差しながら、 == シャはユーリ

「っ!? 追い駆けて来てる!?」

てくる白衣集団を見て顔を引き攣らせた。 ミーシャの解説を聞いて、 思わず振り返っ たユーリは後ろから迫っ

生徒達はほとんどいろんな方角に逃げたようだが、 集団と一人の金髪の少年がユーリとミーシャを追い駆けてくる。 何故か、 白衣の

白衣の集団の前で走っている金髪の少年を見たミーシャが淡々と告 年だな」 で彼は 確かリー デル・マクスフェル先生に注意されてい た少

げる。

「え?そのリーデルなんたらっていう先生ってあの厳格そうな先生

5 こくりと頷いたミーシャを見、 一番最初に目をつけられた、 あの白衣の集団もユーリ達を追い駆けているらしい。 不法侵入少年がこっちに走ってくるか ユーリは理解する。

でよ 危機迫っ た少年の言葉にユー リとミーシャ は顔を見合わせる。 うるせー ちょっと!! つ 捕まるならもろとも道連れじゃ そこの金髪のあんた!! 追い駆けて来ない ああ

なぁ くっ、 つ 来るな!! ! ? ジョー ダンじゃないっ わたし達は関係ない 断然お断りっ

[・]待てええええっ!!」

怖い顔をした白衣の集団がどんどん近付いてくるさまは、 のすごく不気味だ。 何だかも

「い~や~ああああああっ!!」

リの悲鳴が普通科校舎に高らかに響き渡った。

どこに行った?」

「ダメだ。見失った」

白衣を纏った数人の生徒がぽそぽそと話し合っている。

「もういい。 戻って『学研』 の準備をしよう」

「はい

でろぞろと教室から出ていく姿を、ユーリは机の下で息を潜めて窺っかが

っていた。

教室から白衣の生徒がいなくなるのを確認したユー リは詰めていた

息をほっと吐き出した。

「ふたりとも、もう大丈夫だよ」

机の下から抜け出したユーリは服についた埃を払いながら、 の大きなカバーに声をかける。 埃まみ

「ぶはっ!!」

「ごほっ、けふんっ」

埃まみれのカバーから出て来たのはミー シャと金髪の少年と壊れて

けふんつ、 賛成っ、げほっ」 とりあえず、 こふっ ここから出よっ、 うん。 そうしよっくふっ しゅ んつ

物置代わりにされていた教室から抜け出たユーリとミーシャは窓を 全開にしてようやく一息ついた。 舞いあがった埃と戦いながら、三人は隣の教室に入り込んだ。

つ、 はあ~。 助かった。 捕まるかと思った」

あんたのせいでしょうが!! あんたの! .!

椅子に座ってだらりと伸びている少年をぎっとユーリは睨みつける。

をユー リとミーシャ に向けた。 短く刈り込んだ金髪についた埃を少年は払い、 勝気そうな榛色の目

どこにでもいそうな顔立ちの少年だが、 と、記憶が揺り起こされた。 好奇心で輝く榛色の瞳にふ

(あ、昨日専門階にいた子だ)

を睨んだ。 ユーリがそう思っていると、ミーシャはいささか不機嫌そうに少年

「君は……。確か、基礎化学学の……」

「知り合い?」

選択する授業が似ていて、 よく見かけるんだ。 彼を」

端的なミーシャの言葉をユーリは自分なりに噛み砕いてみる。

つまり、 顔は知ってるけど、 名前は知らない赤の他人だと」

「ああ」

おい。それ、本人の前で言うか?」

堂々と頷いたミーシャ に少年は引き攣った笑みを浮かべる。

首からゴーグルをぶら下げている。 ニッと笑って自分を指差すイオンは 俺はイオン。 イオン・ガスパール!! 7 学院 科学科の科学学部志望! の制服を軽く着崩し、

「わたしはミーシャ・ヴェルデだ」「あたしはユーリ・トレス・マルグリット」

イオンをユーリとミーシャは微妙な表情で見やる。

とで、よろ」 「いや〜。 お互い災難だったな。 まっ、 これもなんかの縁ってこ

にこやかに微笑むイオンにユーリとミーシャが切れた。

だが、イオンは反省の欠片もなくカラコロと笑う。 「ま~ま~。どうどう」 わたし達はお前の軽率な行動に巻き込まれた被害者だ hį た、がっ!! 呼んだ災難でしょうが!!」

何故、 関係者以外立ち入り禁止中の大会議場に入ったんだ?」 その様子にミーシャが呆れたようにこめかみを揉んでうめく。

隠されると余計見たくなるのが男のサガっていうか、 だったじゃん?それなのに、 だってな? 去年までは『学研』準備中も入場オッケイ 今年はダメって酷くねぇ? 本能だからさ それに、

吹けば飛ぶようなアホな理由だった。 準備中の大会議場に無断侵入した理由は、 羽毛よりも軽い

無節操なお前の行動のせいでわたし達は恐怖体験をした」

そうだよ!! 白衣着た人達にあんな風に追い駆けられるのって

怖いんだから!!」

ユーリはほとんど忘れかけている、前世日本で柴崎由利だったころ

に見たホラー 映画を思い出して身震いする。

あの集団の白衣に血糊でもべったりついていたら逃げる前に卒倒し

ていた。

の毒になったらしい。 ユーリとミー シャが心底げんなりしていると、 さすがのイオンも気

あは、スマン」

この世の悪事など何も知らないようなあっけらかんとした清々しい

笑顔に殺意が湧く。

もういい。行こう、ユーリ」

[・]うん。 あたし仕事あるし」

イオンを無視することに決めたミーシャとユー リは彼に背を向けて

教室を出た。

あ、ちょいまち。 ちょいまち!!」

わたわたとイオンが焦ってユーリとミーシャを止める。

「なんだ?」

肩にかかったイオンの手を煩わしそうに払ったミーシャ の目には隠

しきれない苛立ちがあった。

て姿勢を正す。 その目に怯んだイオンだが、 気を取り直すように咳払い をし

?

「あんた、

『植物の化学』

をいま王立学院図書館で借りてるよな

「ああ。借りている」

たユーリは嫌な予感がする。 何故そんな事を訊く?と言うように首を傾げるミー _ いよっしゃ、らっきー」 とガッツポー ズをするイオンを見 シャ。

「その本、三日間だけでいいから貸して!!」

「え?」

「絶対ダメ!!」

ユーリの予感大的中。

頼んだイオンだけでなく、 シャさえ驚いた顔でユーリを見た。 頼まれた事がうまく飲み込めていないミ

出ししてるの!! ら絶対ダメ!!」 されたら図書館の本が無くなったり、 図書館の本は借主の身元がきちんとわかっているのを前提に貸し 図書館の管理下にない貸し出しとか、 傷ついた時に揉め事になるか また貸し

一息に言いきったユーリは肩を揺らして荒い息を吐く。

ケチしないで、ちょっとくらい融通してくれてもいいじゃ 絶対ダメ!!」 ええ~。 でもさあ。 俺もミーシャも『学院』 の生徒じゃ hį ケチ

イオンは面倒くさそうな顔でぎっと睨むユーリを見下ろす。

馴れ馴れしいイオンの手をミーシャは払い落す。 わたしは、 一言たりともお前に貸すとは言ってい ないんだが?」

巨 三日だけでいいからさ!!」

本が傷ついたら弁償するのはわたしだ」 お断りする。 お前のようにちゃらんぽらんな奴にまた貸しして

ええ~つ。 頼むよ!! なっ、 このと~ 1)

た本、そう簡単にまた貸しできるか」 断る。 わたしもあれを読み始めたばかりだ。 苦労して借り出し

頭の上で両手を合わせて拝むイオンにミーシャは冷たい視線を投げ

かけた。

「返却されるのを大人しく待て」

「そーだよ」

少女二人の冷たい視線を受けたイオンは悔しげに地団太を踏む。

「根性悪の、ドケチ女!!」

ミーシャが投げた靴がイオンの顔面に当たって跳ね返った。 「うるさい!! 節操なしの馬鹿男!

5 P ガール・ミーツ・ボーイ (後書き)

新キャラ、イオン登場。 ちょっとはっちゃけたキャラが書きたかったのです。

6 P水面下の混沌 (前書き)

『禁制魔導書』達も『学研』に興味深々。

た極上の魔導書です。 ちなみに、彼らは歴代最高・最上の魔導師が心血を注いで作りあげ

なので、彼らの話にお気を悪くしたとしても許してあげてください。

6P水面下の混沌

くその少年は、馬鹿だな >

<ああ、アホだ>

「あはは、そう言うと思った」

ユーリは『禁制魔導書』階にいた。

放課後、 ミをいれた。 をせがんだ様子を語ると、 だ様子を語ると、やはり『禁制魔導書』達は辛辣なツッコイオンが起こした騒動とその後ミーシャに図書のまた貸し

難しかろう^ くその少女。 <同い年とはいえ男に回し蹴りと一本背負い極めるのは、 ミーシャか。 どこかの武人を親に持つ娘か? ^ なかなか

「うん。 れたんだって」 お父さんが王宮勤めの騎士で、 護身術を一通り叩きこま

<ほう>

華麗に極まった回し蹴りと一本背負いを思い出したユーリはくすく すとこらえきれずに笑った。

あの後、 結局喧嘩になった。 イオンに図書のまた貸しを迫られたミーシャは彼と言い争

その最中、

 \Box いせ、 こっちにも事情があってだな!! って! わぁ

61 61 加減に! やあっ

オンがミーシャの体に抱きついた。 しつこいイオンをミーシャが振り払っ た瞬間、 バランスを崩したイ

ミーシャの胸に顔を突っ込んで抱きついたイオンの姿しか見えず。 本人は後々、 『きゃああああああっ! 凭れかかっ ただけだと抗弁するが、 ユーリから見れば、

の様な言葉使いをした事に驚く間もなく、 いままで男勝りな口調しか使っていなかっ たミー イオンの体が宙を舞った。 シャ が初めて少女

でも、 ちょっとほっとしたんだ」

< 何をだ? >

んていうか、その......自分が置いて行かれたような気分になって... いて、特にミーシャとアリナはすごく立派な事を言ってて、......な 「ミーシャもアリナもフィーナもきちんと自分の道を決めて進んで

ている。 場であり、周りは対立しあっているというのに、 普通の人には出来ない立派な志を、 持って、己の意思でお互いに歩み寄ろうとしている。 科学を志すミーシャと魔導を志すアリナはお互い勉学に研鑽する立 同じ年でありながら二人は抱い 自らの意思を強く

だから、 ほっとしたのだ。

ミーシャがイオンと喧嘩するのを見て。

彼女も自分と同じ年の生徒だと実感できて、 そう言うと永きを知っている『禁制魔導書』 達は軽蔑するだろうか? ほっとした のだ。

お前 の小ささは誰よりも我らが知っているゝ

くいまさら何を言うか >

<そーそー、お前の胸の小ささも>

「うっさい!!」

結局ここの魔導書達はちゃらんぽらんなのか、 茶化す『禁制魔導書』 達にユーリはムッと顔を顰めた。 と少し落胆する。

< 小さなお前はゆっくり大きくなればよかろう >

< 大きくなる幅も限られていそうだしの >

< どうせ位など無いに等しいほどの小さな貴族の娘なのだしな >

「なんか、さりげなく失礼な事言ってない?」

小さいだの、大きくなれる幅など少ないだの.....。

(でも、気遣ってくれてる?)

「ありがとう」

さわさわと騒ぐ魔導書達はいつもと変わらないように囁き合う。

<どうせお前との付き合いも我らにしてみれば瞬きに等しい >

< 我らはここから出られんからな >

< 我らの退屈を忘れさせてくれるのはお前だけだ。ユーリ >

(結局、退屈しのぎなのね)

そう思って落胆するが、 でも、 さっきとは違って気分が大分上昇し

た。

「じゃあ、 あたしはしっかり学校の勉強でもしようかな」

< 少しでもお前の伸びしろが伸びるように頑張れ >

< どうせ、それほど伸びないだろうがな >

余計なお世話!!」

『禁制魔導書』達はやっぱり一言多い。

話をし続ける。 ムッとユーリが顔をしかめても、 我関せずと魔導書達はひそひそと

<そうそう、『学研』といえば.....>

いな> くああ、 『学研』 の成果の良し悪しで学科の予算分配が決まるらし

え、?」

< なるほど > と頷き合う魔導書達をよそに、 くほほう、 それでは各学科の教授陣も必死になるわけだ ^ ユーリは頬を引き攣ら

せる。

ビアらしい。 魔導科と新科学科の対立は知っていたが、 事態は予想より遥かにシ

のだ。 < 魔導科に行っていた 間違いはない~ 9 級魔導書』 き 9 級危険魔導書』 が言う

<司書達も今年の『学研』 には興味津々らしい^

< 仕事サボってよく噂話をすること >

後でサボってた司書の名前教えて。 館長にチクるから」

る ペンを回してユーリは司書の噂話を拾って来た魔導書達に顔を向け

<魔導階にたむろする魔導師共もよく話題にしているね >

< ああ、 新学科加入学部の結果を賭けに使ってるしな ^

.....

司書達が忙しい間、 魔導階の風紀は乱れに乱れ ていたようだ。

(まともな魔導師って世の中にいないの!?)

ユーリは顔をしかめて溜息をつく。

魔導階の見回りを強化してもらうえるようにエリアー しなければいけない。 ゼ館長に報告

っていたんだろう? ^ くそういえば、 『祭壇の上の月』 お 前、 カイゼル教授のところに行

< 何か面白い話は聞けなかったかい? ^

くああ、 大会議』 ヴォルヴァ? > 中に暴言吐いて、 ヴォ ルヴァが 学院 謹慎処分になったようだ ^ 関係者一同が勢揃いして行われた『

< ああ、 年がら年中ヴェ い浮かべる。 くそういえば、 あの二流どころの占術魔導師か ^ カイゼルはヴォルヴァの上司だったなゝ ルを被り、 胡散臭い感じの女魔導師をユー リは思

だ。 助教授、 導師としての力がないからなのか、 無いと聞くあの先生が謹慎を喰らったところで特に問題はなさそう という立場のせいか、 それとも魔導書達が言うとおり、 受け持っている授業はほとんど

魔導書達の話から聞くに、 そう思っているのは彼らも同じようだ。

しかし、

< それに不満を持つ教授方がいるらしい >

他の教授のところに行っていた魔導書が魔導書やユー リの予想を裏

切る発言をした。

くしかし、 占術魔導師としては二流どころか三流近いぞ? >

< 擁護しても利点はないと思うがね? >

<今回ばかりはヴォルヴァが悪いだろう?>

魔導師に対して評価が辛口なのは標準設定だ。困惑気味に『禁制魔導書』達は言う。

< あれじゃ ね ? そこは女の色仕掛けってやつで、 たらしこんだん

< ばっか、ヴォルヴァは魔導師としても三流どころだが、 女として

も二流落ちだぞ >

無駄にプライドあるしゝ

<面もパッとしないしなぁ><乳も小さいし、無駄にプラ

思わずペンを握る手におかしな力が入り、 字が歪む。

(やめてくんない!? 乳発言!!)

きる。 ヴァとユーリの胸元が比べられ、 いま下手に口出しするとユーリの方に視線が来て、 屈辱的な発言をされる事が予想で ヴォル

それだけは避けたいユーリは賢明なる沈黙を守った。

得たと? > くじゃあ、 くお主ら、 女は乳じゃなく尻だと、 なんだ?ヴォルヴァは教授方を(自主規制)して擁護を わしの主は言っておったぞゝ

< いや、 その方法をとったにしてはあやつの尻に(自主規制) な感

じが足りんな >

<じゃあ、意味無いじゃん!!>

だって俺を作っ 主規制)して、 くいや、 あれじゃないか? た魔導師は言ってたぞゝ (自主規制) するのが男の自尊心と快感を高めるん 無駄にプライドある高飛車な女を(自

「やめんか!!18禁魔導書共が!!」

最早、 自主規制ワードが多すぎて文章化できません

! ? 禁制魔導書』 の『禁制』 つ て18禁って意味の 7 禁制。 なわけ

近頃、 そっちの解釈の方が正しいと思い始めて来たユーリである。

つ < て! いや いや、 > あいつらははヴォルヴァの事なんかど 一でもい 61 んだ

奴らは魔導科より科学科が擁護されるのが気に喰わないだけさゝ

< あ、なるほど~ >

合点がいったのか、 S 禁制魔導書』 たちは感嘆の溜息をつい

< カイゼルはヴォ ルヴァを煙たがってるしね ^

ね < > 占術が何たるか、 わかっていない』 ってい つもぼやい てい たし

くああ、 くじや の互助組織に加盟していてな。 かれて、 ぁ ヴォ 渋々用意した就職先がカイゼルの下らし なんでヴォルヴァはカイゼルの下にいる?ゝ ルヴァは無能もいいところだが、 オストロはヴォルヴァの師に泣き オストロと同じ魔導 >

(いわゆる、コネ入社ってやつ?)

魔導書達が話すオストロという名はおそらく、 アルス・オストロ教授。 アルカス カリスト

侯爵家の一員である、貴族中の逸材だ。魔導科の惑星魔導学の教授で魔導科の教授主任でもあり、 オストロ

(でも、あたしあの先生苦手なんだよねぇ)

貴族 でいるらしい。 れむように生活の事や支援について語ってくるところから察するに、 図書館で働くユーリにそれなりに親切なのだが、 の娘であり、 『学院』の生徒でありながら働くユーリを憐れん 何とな くいつも憐

づらい。 い。 馬鹿にして、 みで施しをしてやろうとしてくる奴は虫唾が走るし、 侮っ てくる奴らは腹が立つ。 U かし、 見当違い どうにも扱い の憐 れ

だから、 『嫌い』という感情でなく、 生理的な『苦手』が際立つ。

したらしい < そのさい、 > ヴォ ルヴァ の師はかなり希少な魔道具をオストロに渡

「って!! 賄賂かい!!」

思わずツッ コんだユー ・リに『 禁制魔導書』 達は呆れた様に溜息をつ

<オストロも分野違いだのなんだの言い訳しながら、 くよっぽど厄介払い の約束をしてヴォルヴァを押 したかったんだな。 しつけたからな > ヴォ ルヴァ の 師は カイゼルに援

「どんだけダメなの。ヴォルヴァ先生」

<ダメダメだな>

「なんでクビになんないの?」

<ヴォルヴァの親もかなりの資産家らしくてな。 貴族魔導師達の

派閥には必要な一員らしいゝ

(うわぁ、知りたくなかった。 裏事情.....)

学院』 学校内で派閥争いとか本当にやめて欲しい。

< まぁ、生徒には害はなかろう >

りまくりだから!!」 いやいや。 あの先生、 霊感商法マジでしてたじゃない!

< 心配すんな。 だまされるのはアホな貴族のボンボンだゝ

「貴族の子弟をだますと後々面倒臭くない?」

るものか > く大丈夫だ。 貴族の奴らが自分の失態をそうそう大っぴらに暴露す

くそうそう、 不名誉な事は隠したいのが貴族のサガだゝ

「あ、そー」

頬杖をついたユーリは半眼で溜息をつく。

『禁制魔導書』達の言う貴族がどんな貴族であったか聞いてみたい

気がする。

情まで語られてしまう事になるかもしれない。 魔導書達だ。 しかし、『魔導』という限られた者達が使う秘匿された学問を記す 彼らが語る貴族の事を知ると、知りたくなかった裏事

そういう面倒くさそうな裏事情をユーリは知りたくはない。

つ てたけど、 派閥争いやら、 意外と俗っぽいんだね」 資金調達やら、 魔導っ てもっと高尚なものだと思

<霞を食って生きていける魔導師はおらん>

< 研究に金は必要だと、 前に言っただろうに ^

みじみ言ったユーリに魔導書達は呆れたように応える。

く金のな い魔導科の学部はきついぞ?

係を結ぶようになったんだしなゝ <魔導科の資金管理をしているせいでリドルは男子生徒と禁断の関

の先生の話題はやめて

ください」

たくない。 リドル教授にユーリは会った事はないが、 会う機会があっても会い

出来ない。 魔導書達の話が衝撃的すぎてもうあの先生を先入観なしで見る事は

くまあ、 リドルが生徒達と(自主規制)な関係になったのも、 資金

調達が大変になってかららしいな^

しな > < 資金調達は大変だからなぁ~。 ... 俺は資金調達のために作られた

金を作ったぞゝ < 我を作った魔導師は可愛らしい子弟を囲って (自主規制) して資

達を(自主規制)して資金を提供してもらってたぞ^ くそうそう、俺を作った魔導師はさみしい夫婦生活送ってる貴婦人

の たくなかっ やめ ! ? て 可愛らしい子弟囲うってそれだけで資金の無駄じゃん!! そこ! たから! 特にあんた!!あんた作った魔導師って何考えてん あんた作った魔導師がヒモだったなんて知り

ったんだから ^ < 、まあ、 仕方ないだろ? 奴は魔導と体以外はいまいち微妙な奴だ

「体とか生々しい発言やめてください!!」

美貌でな、 くいや、 しかし、 貴族達と月に数回 (自主規制) 奴が囲っておった美男子は王の愛人になるほどの

お腹一杯だから!!」 「王国の裏事情まで暴露しないで下さい!!学校内の裏事情だけで

<根性ないのう>

(なくて結構です....)

脱力したユーリはソファに座りこむ。

り資金を引きずり出しておったな >..... などという話は、まだ生易 断の関係を ^ < 我を作った魔導師は何人もの貴族の男共からがっつ しい方で、もう耳を塞ぎたくなるような18禁話が至る所で話され そう言えば、 俺作った魔導師は可愛らしい女の弟子と禁

歴代最高の魔導師が作った魔導書が、コレ達だ。(わかってたじゃない。あたし.....)

ふっと遠い目をしたユーリは大人しく耳栓をして課題に勤しむ。 (こんなもん作り出す魔導師がまともなわけないって......)

いま、 ひとりの少女が静かに大人の階段を上った。

6 P 水面下の混沌 (後書き)

うです。 事から身を守るための最強の盾だと、 『触らぬ神に祟りなし』 ` 見ざる、 ユーリさんもわかっているよ 聞かざる、言わざる』は厄介

/ P其れは密やかに紡がれて

くっ、と。なんだ、ユーリの奴が寝てるぞ~

どうやら、 魔導書達が見下ろす先で、 レポート用紙は課題らしい文章で埋まっている。 課題を終えた後、 ユーリは本に突っ伏して眠っている。 本を読むうちに眠ってしまったらしい。

<おい、 구 ij こんな所で寝ていると風邪をひくぞ?ゝ

達を伝染していく。 <ユーリ ^ < 起きろ ^ < ユーリや ^ と彼女を呼ぶ声は『禁制魔導書』

く起きないぞ>

< 我らはユーリが起きなければ魔導を使えん >

< 困ったのう >

さわさわと『 禁制魔導書』 達はどうにか出来ないかと話し合う。

くん? エリアーゼだ>

<こちらに来るぞ>

 \Box 禁制魔導書』の不可視の視線が『禁制魔導書』 階の扉に集まる。

゙ お久しぶりですわぁ。『禁制魔導書』方」

< エリアーゼ >

< 珍しい >

9 禁制魔導書』 のある部屋の扉を開けた金髪碧眼の美女は『禁制魔

ユーリさんは来ていませんか? お話があったんですけれど?」

< 暖炉前のソファで眠っている >

<起こしてログハウスに戻してやってくれ>

「あらあら、はいはい」

くすくすと笑いながら、歩くエリアーゼに魔導書達は囁く。

<エリアーゼ。お前、気づいているだろう?>

<ログハウスに魔導の気配がある>

< ユーリは気づいていない >

<あれを何故放置している?>

.....

エリアーゼはにこりにこりと微笑むだけで何も応えない。

それにしびれを切らしたのか、 一冊の『禁制魔導書』 がエリアーゼ

の前に落ちる。

<答えよ、エリアーゼ!!>

「そう、ですわねぇ_

エリアーゼは落ちて来た魔導書を棚に戻す。

反応は冷ややかだ。 「宮廷魔導師が来てくれると図書館の評判が上がりますから」 ね」と言いながら小首を傾げたエリアーゼに『禁制魔導書』 達の

< エリアーゼ >

ぞろり

部屋の温度が急速に下がり、薄暗くなる。

魔力をたっぷり秘めた部屋の空気が重苦しく濁る。

< お前が目をつけているのはそんなことではなかろう?>

< 小賢しい > < 女狐が >

<あやつの魔導師としての能力もなかなか悪くなかった>

< お前、 ココの神秘を餌に、 あの魔導師を利用するつもりだろう?^

どろりと体中に巻きつくような濃密な魔力に曝されながら、 エリア

- ゼは澄ました顔でふっと微笑む。

「まぁ、人聞きの悪い。入場料を取るだけです」

< 否定はせんか >

それに、 魔導に詳しい戦闘要員は必要でしょう?」

< 王に仕える宮廷魔導師を傭兵代わりに利用するか >

<いい度胸をしておるな>

「どうとでも」

くすくすと笑うエリアーゼはすっと目を細める。

しょう?」 あなた達だって、 大切な【語り手】にうっかり死なれては困るで

その言葉に魔導書達はざわりとざわめく。

<何があった?>

< お前がココに来たのは何故だ? >

ざわざわと騒ぐ魔導書の声がまるで潮騒のよう。

潮騒を割るのは女神のように麗しい美貌の王立学院図書館館長。

「魔導書がいくつか返ってきません」

その声は部屋中に響き渡り、 金属の小さな鐘の様な、 涼しげで通りの良い声が紡いだ言葉。 静寂を呼ぶ。

そして、

く何のために記された。 <それがどうした?さっさと呼び戻せばよかろう> 紋 " だ >

訝しげかつ、 小馬鹿にするような魔導書達の声が返って来た。

るූ その中でも魔導書に押された。 魔導書が持ち逃げされても必ず戻ってくるような細工が施されてい 王立学院図書館の魔導書・図書には全て 紋" は特殊で何かの拍子でうっかり 紋"が押されている。

しかし、

導が弾かれました」 「どうやら、 かなり高位の魔導師が掠め取ったようで、 " 紁" の魔

一瞬、魔導書達は困惑したようにざわめく。

めるように静かに声を部屋に響かせる。 その困惑から先に脱出したのはここでもかなりの古株の魔導書達。 いつもはあまり会話に参加しない彼らは、 困惑する魔導書達をなだ

単に弾かれるものではないのだが... ^ < ふ む。 たとえ魔導師の力が高かろうと、 魔導書の" 紋" はそう簡

何か の 儀式」 に使われているのかねぇ?>

その可能性が一番高いと思います

対する拘束力が高くなっていく。 魔導書に記される。 紋 は魔導書の持つ魔力量に比例して魔導書に

だが、何らかの理由で魔導書の魔力が" てしまうと゛紋゛が無効化してしまう事がある。 紋" の持つ魔力より高まっ

その代表的な例が「儀式」。

力が高まり、 魔導書の魔力を底上げして「儀式」を組み込むと、 " 紋" が無効化してしまう。 魔導書自体の魔

仕掛けていたり、 に図書カードに魔導書を利用した「儀式」 もちろん、 図書館側はそのことが分かっているから、 魔導書を使った「儀式」 の使用を制限する魔導を の使用を禁止してはいる 紋 別

別 の様で、 魔導書を借りている人物と現在魔導書を手元に置い 図書カードを標的にした逆探知も成功しませんでした」 ている人物は

ふぅっとエリアーゼが困り果てた様に溜息をつく。

< <我らはいまのところ何も感じない..... 何の「儀式」が始まっている のかはわからんか? >

>

< 未返却中の魔導書の銘は何という? >

未返却中の魔導書は、 『マレフ 1 キアの奇跡』 7 神秘の手引き』 0 計四冊」 7 星の神殿 9 惑星の影

くずいぶん多 ĺ١ な

ええ、 ですから比較的早く気づいたんですけど..

< やばそうなのは 『星の神殿』 と『マレフィキアの奇跡』 くらいか

?

< 級危険魔導書』 が所在不明になるとはなゝ

ね? > < 盗んだ魔導師は「儀式」 がどれだけ危険かわかっているんだろう

のか?> <王立学院図書館の魔導書に"紋"がつけられる理由を知っている

< お主、 なかろうな?> まさか、 구 リに未返却魔導書の回収をさせるつもりじゃ

がふっと静まる。 古株の『禁制魔導書』 が発した声で、 ざわざわと騒いでいた魔導書

エリアーゼは痛いほどの沈黙をその薄紅色の唇で裂く。

学院』 いない」 魔導書は全て『学院』 の生徒であるユーリさんほど『学院』 の外には出ていません。 を動き回れる司書は なれば、

肯定ととれる言葉に『禁制魔導書』 階が揺れた。

< エリアーゼー!!>

<危険だ!!>

<アレが魔導を使えぬのを知っ ているだろう!! >

< 魔導書を組み込んだ「儀式」 をお主らが禁じている理由を忘れた

か!? >

<ユーリを危険にさらす気か!?エリアーゼ! >

ええ、ですから、あの魔導師が必要なんです」

すな!!> < の わからん部外者に守らせるくらいなら、 구 リを危険にさら

<未返却魔導書の回収くらいお前が行け!! >

「そう言われましても、 私達も大っぴらには動けないのです」

< 何故? >

「大人の事情です?」

ハートマー クとキュー トなウィ ンクが語尾に付いた。

< ふん。下らん派閥争いか >

『禁制魔導書』達は鼻白む。

< 科学派と魔導派、の教授陣の対立か? >

< ああ、 魔導派には貴族が多く、 科学派には新興貴族や商人がスポ

ンサーについている >

く古きと新しき、 科学派と魔導派の教授陣の対立はそのまま、 この

国の身分格差を顕している >

くああ、 そして、 理事達もそれに乗じて暗躍しているようだしな...

: >

くだが、 々と狙う奴らは多い ^ それだけではなかろう > < ああ、 『 学 院』 の技術を虎視眈

< 他校の教授陣も『学研』に来ると聞く >

< 学研』 は対立派閥を陥れるのにもってこいの機会..... >

< 馬鹿馬鹿しい^^下らん対立で『学院』 を危険にさらし、 他校に

恥をさらす気か?>

くだが、 お前は、 いや王立学院図書館は絶対中立的立場だろう? ^

「ええ、ですから館長である私は動けません」

な> くお前が動けば、 科学派側の教授陣は嬉々として魔導側を批判する

< また、逆も然り..... >

< 何百と月日は流れたが、 人とは実に愚かで変わらぬものだなゝ

「ええ」

エリアーゼはすっと顔を伏せる。

恥いるように、悔むように。

< エリアーゼよ >

< 我らを一時的でい ١١ 『解放』してくれないか?」

古い 7 禁制魔導書。達の声にエリアーゼは静かに首を振る。

は【真実】 いた、 をその身に宿す『魔導書』 あなた方を『解放』 するわけにはいきません。 なのですから」 あなた方

< 戯れ言を >

< 我らはそれ故に縛られる >

くこの忌まわしき牢獄から >

< 禁忌を禁忌に至らしめるがために我らがある >

良い事も悪い事も何もかもを飲み込んだ、 深い井戸の底の水はこん

な風にたゆたうのだろう。

界中の闇という闇を圧縮し、 永い永い間、 どろりと濁った汚泥の中に沈められた物のように、 濁らせたかのように暗い、 昏い声。 世

ええ。ですから【語り手】は守ります」

くああ、 この忌まわしきこの因習を継ぐ者をゝ

< この禍々しき牢獄を守る看守が【語り手】だ >

< 異なる世界より堕とされた哀れなる魂を持つ者 >

<何にも縛られぬ自由な魂を持つ存在>

めて保管しておったからなゝ <お主らはいつの世でも「そうした存在」をこの『学院』 に閉じ込

「ええ、 図書館館長の務めでしたわ」 【紡がれぬ言霊】を受け継ぐ器を守る事が、 この王立学院

だっただろうよ ^ くああ、 ここに集められた者達の中でも【語り手】 は特異中の特異

< 悲哀に身を落とし永遠を彷徨う生命を慰撫する者だったからな > く何しろ狂気に侵された賢者の代弁者だからな >

< 自由なるがゆえに孤独な【歌い手】でもあったからな >

< 唯一無二がゆえに何にも染まらぬ者であるからな >

語り手】を守るための」 あの魔導師はいわば、 9 保険』です。 ここを守り、 継ぐための【

< 愚かな >

<忌々しい>

あなた方とて、 先 代 " の願いを守りたいでしょう?」

 \neg 儀式」 禁制魔導書』達がふっと押し黙っ が行われようとしている。 た。 学院』 がややこしい時に

ている。 海千山千の『 そして、 その標的になる物を『禁制魔導書』達は守りたいとも思っ 禁制魔導書』 達は「儀式」 の標的になる物がわかる。

<仕方あるまいか.....>

言う声や諦観するような声が聞こえ出す。 しばらくすると、 『禁制魔導書』達の不満げな声とブツブツ文句を

<ユーリを起こせ、エリアーゼ >

<..... ユーリの意思に任せよう >

リアーゼはくすりと笑う。 不承不承を体現するような『禁制魔導書』 達の声を聞きながら、 エ

だからこそ『保険』を野放しにしているのだ。 もちろん、 あの方の"夢" エリアーゼとて、ユーリを苦しめる気はない。 は邪魔させません」

ウ・スフォルツィア) (しっかり働いてもらいますわ。 アヴィリス・ツヴァイ= ネル

ぽんぽんと少し強めに揺するように叩く。 ますよ?」 エリアー ゼの手が『学院』 「ユーリさん。 ユーリさん。 の制服越しにユーリの細い肩にかかる。 起きてください、 風邪をひいてしまい

ぼんやりとした彼女の目がふっと理性の光を取り戻す。 と目を擦りながら、 ユーリが起き上がる。

途端、その瞳は真ん丸く見開かれる。

澄んでいた。 異なる世界を見て来たのであろうその漆黒はどこまでも深く、 「あれ?エリアーゼさん!?」 深く

7P其れは密やかに紡がれて (後書き)

アヴィリスの動向はバレバレだったようです。

しかも、しばらく話に急展開はなさそうです.....。久々投稿で、すいません。

8P普段笑っている人が怒ると怖い(前書き)

長い事投稿しなくてすいません。久しぶりの投稿です。

8P普段笑っている人が怒ると怖い

「えっ !?未返却魔導書! ; ?

ユーリの素の頓狂な声が『禁制魔導書』 階に響いた。

「ええ、 『一級魔導書』 7 一級危険魔導書』を含めて計四冊

「よんつ

「............一応確認しますけど、写本のほうでなく、原本のほうで聖母のように柔らかな微笑と共に言われた言葉にユーリは絶句する。 一応確認しますけど、

「残念ながら.....」

すか?」

た。 困っ たように微笑んだエリアー ゼをユーリは真っ青になって見つめ

写本の方を貸し出すのが一般的だ。

一般的に魔導書は著者が直接書いた原本ではなく、

原本を元にした

原本さえあれば、 写本が持ち逃げされても何度でも書き直す事が出

来るから。

の比喩的な表現をそのまま再現する事は出来ない事。 しかし、この写本の作業の際、 問題になるのは魔導書の材質や著者

活版印刷された文字や魔導陣、市販の紙では魔導書は魔力を持たず、 省かれたり、結果、原本とは微妙に違う魔導書になってしまう、 いう理由で写本の魔導書は魔導師達から不評だ。 一般人が書き写すとどうしても著者の比喩的な表現が理解できずに لح

魔導師達は渋々写本の魔導書を借りているのが現状だ。 ほとんどの図書館は写本の魔導書しか貸し出してい た

けれど、 も借りることができる。 王立学院図書館は" 紋" の魔導によって原本と写本どちら

王立学院図書館が魔導師達の『溜まり場』 になるほど人気な理由は

た魔導書のみが並んでいる。 魔導や魔導師を管理・監視する『元老院』 王立学院図書館の魔導階にあるのが写本された魔導書、 が一般貸し出しを許可し その中でも

魔導書のほとんどが原本だ。 『一級魔導書』 7 一級危険魔導書』 『禁制魔導書』 階にある

「そんなにたくさん.....。まさか『学院』 外に?」

きませんから、まだ全て『学院』内にあるはずです」 「いいえ。 魔導書の原本であるあの四冊は『学院』外に持ち出しで

る 恐る恐る訊いたユーリにエリアーゼは安心させるように微笑みかけ

「あ、そっか」

ぽんっとユーリは手を打つ。

原本の魔導書は基本的に『学院』 外に持ち出すことができなくなっ

ている。

これは"紋 教えてもらっていな とは別の魔導であり、 l, 最高機密であるためにユー リも

の魔導が何故か働かなくって..... おそらく、 何らかの魔

導で目くらましをしているんでしょう」

の魔導を無効化?そんな魔導があるんですか?」

· ええ、まぁ 」

言い辛そうに語尾を濁したエリアーゼを見、 恐る恐る問う。

「まさか、「儀式」なんじゃあ」

「その可能性は高いです」

「そんな!!」

思わず蒼褪めたユーリをエリアーゼはそっとなだめる。

まぁ、 구 りさん。 そんなに慌てず、落ち着いて」

うくらいの魔力が解放されるんでしょう!?」 だって!!「儀式」が行われていたら、 『学院』が崩壊してしま

ても大丈夫ですよぉ?」 「『学院』が崩壊なんて言いすぎです。そんなに大袈裟に考えなく

にっこり、 ほんわかとエリアーゼ館長は微笑んでいる。

る自分に気づく。 おっとり優雅に微笑むエリアーゼを見て、一人だけ慌てて焦ってい み、そして疲れたように、肺が萎むほど大きく息を吐きだした。 反射的に声を荒げかけたユーリは、その笑顔を見てぐっと言葉を飲

ない。 どれだけ焦っても、 書兼女子学生である自分にできることなんかないし、 事の全容がよくわかっていない段階で一介の司 慌てても仕方

リアーゼがこんなに落ち着いているのだ、 それに、 ないのだろう。 がこんなに落ち着いているのだ、事態はそれほど逼迫してよくよく考えてみれば、王立学院図書館の責任者であるエ

ほっと息をついて肩から力を抜いた。

すから」 崩壊、 は大袈裟です。 せいぜい『学院』 が半壊する程度で済みま

「全然フォローになってませんから!!」

爆弾発言に思わず叫んだ。

平和を愛する、そして言いかえれば事なかれ主義である日本人だっ 崩壊が半壊に変ったところで、 たユーリには刺激的すぎる話だ。 学院』 への被害は変わらない。

る気配は まぁ、 落ち着いて。 しないそうです。 いまのところ魔導書が「儀式」に使われ これは『禁制魔導書』 方の証言ですから

信用できると思いますよ?」

ユーリがぐるりと『禁制魔導書』 を見回す。 すると、 視線を受けた

『禁制魔導書』が答える。

< ああ、いまのところ我らは何も感じない >

「じゃあ、どうして"紋"が無効に?」

「いまはわかりません。 ですが、未返却の魔導書は回収をしないと

いけません.....」

ぽんっとユーリの肩にエリアー ゼの細い指が当たる。

ふんわりと良い香りのする白い手を見、 にっこりと微笑んでいるエ

リアーゼを見上げる。

......とても、嫌な予感がする。

背中に冷たい汗をかきながら、 もしかして、その四冊をあたしに探し出せとか言うんじゃ ユーリは乾いた笑みと共に問う。

エリアーゼは微笑む。

ユーリの肩をがっしりと掴んで.....。

あの~、 エリアー ゼ館長.....。 手を....」

異常に強く、 ペンより重いものを持った事がなさそうなエリアー 後退りして離れようとも離れない。 ゼの華奢な手は

後退りすればするほどエリアーゼの笑顔が近づき、 ぶっちゃけ

魔導書に詳しいクライヴ副館長とギズー でぶっ 倒れ てい て使えません」 ノン司書はあの専門階の

「ま、魔導階専門司書の方々は!?」

ます」 彼らは通常業務に加えて貸し出し中の魔導書の確認に出払っ てい

ゕੑ 館長!! あたしは学生なんですけど!?」

でしょう?」 「だからこそ、 『学院』内を自由にかつ違和感なしに歩きまわれる

ヮ゙ 儀式」が起こっていたら! を使えませんよ!!」 歩きまわれても、 魔導書を探せるわけが! あたしは「儀式」を鎮めるような魔導 ! だ、

くそうだぞ。エリアーゼ >

<無理強いをさせるな>

< 「儀式」の危険はお前が重々知っているはずだ >

普段はセクハラ発言しかしない『禁制魔導書』 達の援護にエリアー

ゼの手が緩まる。

美女に、にっこり笑顔の迫力に怯えていたユーリは解放されてほっ と息をつく。

動けません」 「本当は私が出向きたいのですが、 大人の事情で私は大っぴらには

「 大人の事情って.....」

「知りたいですか?」

「...... 止めときます」

にっこり笑顔が怖いのです。

「本当はあなたにこんな事を頼みたくないのです」

顔を引き攣らせて後ずさったユーリを見て、 エリアー ゼも溜息をつ

動いてはくれません」 が未返却であるだけではチュ 私達が大っぴらに動けないのは大人の事情のせいですが、 リの自警団も < クラン > の断罪 が、魔導書の、一般では

んですか?」 魔導書を使った「儀式」 が働 61 ている疑い、 では動い てくれない

ええ、残念ながら」

ふぅっと悩ましげに首を傾けたエリアーゼ。

リは身を固くした。 しかし、その体から隠しきれない苛立ちのようなものを感じてユー

どうやら、 ているらしい。 エリアーゼはよっぽど「大人の事情」とやらに腹を立て

ないが、 できないだろう。 エリアーゼを怒らせる「大人の事情」とやらに興味がないわけでは 『禁制魔導書』たちに〈女狐〉と呼ばれるほどに知略に長けている おそらく知ったところで一介の学生であるユーリには何も

(未返却魔導書....)

貸し出しすることが難しく...いや、 そうなったら.....。 ほどの災害が起きる。 未返却の魔導書が「儀式」に使われると確かに『学院』 そうなれば、 王立学院図書館で魔導書を保管 できなくなるだろう。 が吹っ

『禁制魔導書』達はどうなるのだろうか?

구 リさん?」 もし、 儀式」 が起こっていたら、 あたしは逃げますよ?」

<おい!!ユーリ!!>

· 未返却の魔導書の回収に行きます」

<そうだ!!魔導が使えないくせに!!><何を言っているんだ!!この愚か者!!>

< 莫迦者が..... >

ぎゃ じっとエリアーゼを見つめる。 いぎゃい騒ぐ『禁制魔導書』 たちの声を聞きながら、 リは

きょとんと目を丸くしたエリアー ほど小さく呟く。 ゼは、 小さく、 リに聞こえな

「それでこそ、【語り手】ですわぁ」

ふっと口許にエリアーゼは不敵な笑みを浮かべる。

「これをどうぞ」

「これ?何ですか?」

どこからともなくエリアー ゼがとりだした四角いものを反射的に受

け 取 る。

四角いものは重厚な革と金で装飾されている本のようだ。

その四角の本の形をしたものは片手で包みこめるほど小さく、 また、

開いても文字が書かれたページがない。

背表紙の部分から伸びた鎖を見ると本の形をしたチャ ムが付いた

ペンダントのようだ。

「もし、これが使えたらこれは差し上げます」

<おい!!エリアーゼ!!>

くそんなモノに頼るくらいならば、 我らを外に出せ!

<そうだ、そうだ!!我らが外に出れば魔導書くらいすぐに見つけ

られる!!>

貴方方、 前回『咎の隠し部屋』でうっかり二人殺しかけた事をも

う忘れたのですか?」

呆れたようにエリアー ゼは溜息を吐く。

前回、 王立学院図書館に紛れ込んだ魔導書を巡る騒動で、 禁制

達は魔導師一人と司書一人を『咎の隠し部屋』に追い詰め、

そこで魔力を暴走させてしまい、二人を殺しかけた挙句それ

込まれたユーリとアヴィリス魔導師を危険な目にあわせた。

それを知った以上、館長としてエリアーゼは『禁制魔導書』 の自由

な行動を許可できない。

そうエリアー ゼは告げるが、 『禁制魔導書』 達は納得い かない の

轟々と反発する。

そして、 とうとうある『 禁制魔導書』 が禁断の言葉を口にする。

< この (自主規制) 女!! >

その途端 禁制魔導書』 階に深海よりも深い沈黙と圧力が圧し掛

かり、 その圧力の根源からユーリは目を逸らして俯く。 炎すら凍りつきそうな強烈な冷気が部屋中を支配する。

61 ま、 彼女を見てはいけない。

ユーリの視界の端で、 エリアーゼが動く。

彼女は微笑む。

にこりと笑うその顔がもの凄く怖い。

「黙りなさい。 燃やしますよ?18禁魔導書共」

エリアーゼが放つ恐怖に海千山千の『禁制魔導書』この人なら、やりかねない。 達も黙りこむ。

<す.....すんませんでした..... >

問題発言をした『禁制魔導書』がこそこそと謝罪する声にエリアー

ゼは嘆息する。

の件のようにこの階の外、ましてや図書館外に出すことは言語道断 んにはしっかり覚えてもらいます」 「儀式」から身を守るためにも、この『書架』 「と、に、か、く、 いろいろと問題のある『禁制魔導書』 の使い方をユーリさ 方を前

「はい!!」

す。 ユーリは背筋を正し、そして、小さな本のような『書架』を見下ろ

「けして無茶はしないで下さいね?ユーリさん

はい

とりあえず、必要になるであろう資料はここにまとめてあります

から、 読んでください」

ありがとうございます」

エリアー ゼが差し出したのはそっけない茶封筒。

開くと、 中には数枚の書類の

どうやら未返却魔導書に関する事柄をまとめてあるらしい。

ついでに『書架』についての説明書も入っていた。

書の手掛かりが見つかります」 「無鉄砲な科学者の卵達の下に向かうといいでしょう。 きっと魔導

「え?」

にっこりと微笑んだエリアーゼの碧の瞳がユーリをじっと見下ろし

ていた。

謎の言葉と共にエリアーゼは去る。「健闘を祈ります。 ユーリさん」

残されたユーリは、ただその背を見送った。

8P普段笑っている人が怒ると怖い (後書き)

関する事かと....。 魔導書がエリアーゼに言った(自主規制)ワードはおそらく年齢に

すいません。

説明ばかりです。

魔導書と魔導師の関係について.....。

9P魔導師と魔導書

クスハイム帝国 1577年、 のザラート領でしかなく.....」 いまから400年前ザラー ト王国はまだノッ

整然と机が並ぶ教室の中、 は教師の声に耳を傾けながら、ノー セフィー トにペンを走らせる..... ルド学術院の制服を着た生徒達

の中、 のが、 生徒達にとっては子守唄でしかなく、 理想的な授業風景なのだろうが、 ほとんどの生徒は机に突っ伏してまどろみの世界に旅立って 心地よい日の光を浴びる教室 抑揚のない低い教師の声

その中にひとり、 肺が萎れるほど深い溜め息をつく生徒がいる。

(ああ、マジで投げだしたい.....)

セフィ た資料をめくる。 な教科で ある『建国史学』 ルド学術院普通科の必修科目でありながら、 の授業をBGMにユーリは昨日手渡され もっとも退屈

読んでいくうちに、 구 リは憂鬱な気分になるのを抑えられない。

誰 か " ではな 出した理由らしい。 その図書館に返って来ていたが、返却処理されていない魔導書を カウンター に返却された魔導書をすぐに処理せずにある程度纏めて 資料によると、ギズー ノンやオリアナのような魔導階に慣 から処理しようと、 Γĺ が掠め取って行った。 魔導階に不慣れな司書達は少しでも効率を上げようと、 カウンターに置いていたらしい。 というのがたくさんの未返却魔導書を れた司書

IJ フ が探すよう任せられた未返却中の魔導書は四冊 1 キアの奇跡』 ` \Box 星の神殿』 9 惑星の影響』

の手引き』

険魔導書』 その中の二冊、 マレフィ キアの奇跡』 7 星の神殿』 は S 級危

残り二冊、 『惑星の影響』 ح 神秘の手引き』 は 9 級魔導書』

9 一級魔導書。級以上の魔導書が四冊も未返却。

しかも、 その四冊の返却日も、 借り主もバラバラだっ

『星の神殿』と『惑星の影響』 を借りたのはショワナール魔導師。

彼は魔導書の返却に王立学院図書館に来ていた事を魔導階に入り浸

っている魔導師達が証言した。

しかも、 『学院』内にある魔導師専用の宿泊施設から退去して ίÌ る

うえに魔導書を所持していない事が確認済みだった。

ていて、 『マレフィキアの奇跡』 シロ。 を借りた魔導師も数日前に『学院』 外に出

書が何冊か延滞されているみたいだけど.....) (といっても、 紋 " の魔導が上手く機能しなくなってから、 魔導

収が行われる事になった。 書の取り立てを主に請け負う。 王立学院図書館司書が緊急収集され、 保安司書"達による魔導書の強制回 図書館の保安業務や図

そして、 決まった。 今日以後一時的に原本の魔導書の貸し出しを禁止する事が

(今頃、 『探求の館』 は大変なことになってるんだろうなぁ

魔導科 施設がある。 の敷地内には遠方もしくは『学院』 の校舎の側には魔導科に通う生徒用の寮があり、 外から来た魔導師達専用の宿泊 その魔導科

答えは簡単。 何故そんなモノが"学校"にあるのか?

原本の魔導書は『学院』 外に持ち出しができないからだ。

昔 空き部屋を不法占拠する事件が多発した。 になかった頃、 『学院』外から来る魔導師を受け入れる宿泊施設が『学院』 魔導師が『学院』内でこっそり野宿、 『学院』内の 内

事件を起こした魔導師達の言い分は、

 \Box 魔導書を読み終わる前に返さないといけないなんて嫌だ~

選ばれた存在であるはずの魔導師が子供のような駄々を捏ねるのは いかがなものか.....。

館利用者(主に魔導師達)に寄付金を募り、魔導科の寮に併設して それに困った(呆れたとも言う)『学院』 『学院』外から来た魔導師のための宿泊施設を作った。 関係者らが王立学院図書

それが『探求の館』である。

魔導書を無料で借りてじっくり読めるようになった。『探求の館』が出来て以来、『学院』外から来た魔質 外から来た魔導師達も貴重な

しかし、 それだけで、 めでたしめでたし、 とはいかない。

 \Box 原本の魔導書を借りる時は、 己の力量を弁えてから借りましょう』

ほど、 という無礼極まりない一文が魔導師用の図書カー 魔導書の読解は難しい。 ドに書かれてい る

何故に、難解なのかと問われれば簡単だ。

る 般 人や無知な魔導師による魔導技術の乱用・悪用を防ぐためであ

間終了で強制的に返却を迫られる事もある。 暗号が多数使われ、 あんまり能力のない魔導師だと魔導書の半分を読み解く前に貸出期 著者にしかわからないような比喩表現や魔導師間で使われる隠語 そのうえ魔導書はとても分厚い。

貸し出し予約のされていない魔導書は滅多にない。 貸し出し予約がされていない魔導書ならば貸し出し延長ができるが、

長はできない。 それに、 『学 院』 外から来ている魔導師はどうしたって貸し出し延

がある。 学 院 I 外の魔導師には『探求の館』 に宿泊出来る期限というモノ

のを、 返却しないといけなくなる。 宿泊施設の宿泊期限が切れれば強制的に退去を迫られる= 指を銜えてずぅっと待たないといけない。 返却したら魔導書が返却されてくる 魔導書 を

たま~にだが、 魔導科の空き教室に不法占拠する魔導師がい

故に、 返却日の閉館時間まで粘りに粘って魔導書に齧りつ 魔導師達は返却日ギリッギリまで魔導書を手放さな いてい る。

だのに、 今回のように強制回収が行われるとどうなるか.....。

達と" ない (ぜっ 保安司書, つ たい、 きっ と駄々を捏ねて、 魔導師達は大人しく魔導書を回収させて 達の間でいざこざがおこってるだろうなぁ 魔導書を手放したがらない魔導師 れるわけ

しばらく、 魔導科に、 というか、 『探求の館』 に近づかない方がい

考えなくても司書はそんなことわかっている。

だが、

(でも、そうはいかないんだろうなぁ~)

ユーリが見下ろす資料。

それには髪をきつく縦ロールにして、 貴族の娘らしいどこか傲慢な

笑みを浮かべている少女の似顔絵が描かれている。

彼女は、 セフィールド学術院魔導科四年生、 占術学部所属のアデラ・

ヴィ・シンファーナ。

『学院』内に住む女子生徒。

そして、 『神秘の手引き』の借り主。 のはずの少女である。

引き 唯一、原本の所持が可能である『学院』 をまだ持っている可能性は高い。 内にいる彼女は『神秘の手

溢れ出てくる溜息をこらえられずにユーリは吐き出す。

ſΪ 手掛かりがない以上、唯一残っている可能性から潰していくしかな

リのどうしようもない心境を代弁するかのように、 イムが鳴り響いた。 授業終了の

9 P魔導師と魔導書 (後書き)

事態は徐々に悪化中です。

ちなみに、『学研』まであと6日。

10P科学の志

だ・ か ら ! このとー お願い! 『植物の化学』 貸して

٦ ١ ٥

「い・や・だ」

(う、ううっ.....)

厄介事を抱えている日に限って、 ど~して厄介事に出くわしたりす

るんだろう?

ユーリはぐったりした気分で彼らのやり取りを聞く。

居心地のいい中庭。 ユーリの憂鬱な気分とは裏腹に澄んだ青空の下、 綺麗に整えられた

そこで対峙する一組の少年少女。

一方は少女よりちょっと背の高い首からゴーグルをかけた金髪の少 一方は緑の表紙の本を大事そうに抱え持つ亜麻色の髪の少女、 もう

ひょ んなことから昨日知り合ったばかりの少年と少女である。

『学研』まで一週間を切った今日から授業は午後まで。

ユーリはさっそく魔導科へ行こうと中庭の馬車停で馬車を待ってい

た。

馬車を使わないと魔導科につくころにはとっぷり日が暮れているだ 魔導科はセフィ ールド学術院敷地内でちょっと離れた場所にある。

そういうわけで、 い争う少年少女がやってきて、 魔導科直通の馬車を待っているユー いまに至る。 リの近くに言

「あの~、お二人さん.....」

かける。 い加減言い争いに聞き飽きたユーリは敗北者の気分で彼らに声を

第三者の声に二人はふっと正気に返り、 同時に見た。 驚い たかのようにユー

「あれ?昨日の.....誰だっけ?」

「こんにちは、ユーリ」

かくんと首を傾げたイオンを一瞬睨んだのち、 ₹ シャは言う。

「や、昨日ぶり.....」

「あ、昨日の司書か……げ」

げ、 とは何よ。 げ、とは....。 まあ、 あんた達の痴話げんか聞 ίì

てたら、まあ、大体事情はわかるけど」

「 痴話げんかって.....」

渋面になったイオンを睨みつけ、 言い放ったユーリの言葉にミー シ

ャが顔を顰める。

そんなにまた貸ししてほしいの?昨日調べたけど、 産』と『分子構造論』は大人しく待ってるのに.....」 「また図書をまた貸しさせてもらおうとしてるみたいだけど、 の次に貸し出しできるよう申請してるじゃない。 あんた、ミーシ 7 科学の父の遺

「それは.....」

するために、 るらしいから、それに対抗する植物を普通科の植物学部からも発表 口ごもったイオンの代わりにミーシャが溜息交じりに口を開い 「魔導科が変な植物の開発をしたらしい。それを『学研』 植物の化学』 を貸して欲しい.....だとさ」 で発表す

呆れたような口調のミーシャをイオンが睨みつける。

だって!! んだよ、その言い方!!俺はマジで植物学部のこと心配してるん

だからって、 科学者を目指すならもっと計画性と理論性を持て、 あと一週間もない のに植物がそう簡単に開発できる 根性論じ

ゃあ科学を実証できない」

何!?」

ぎゃいぎゃいと言い争いを始めた二人の間で、 イオン少年の発言はかなりめちゃくちゃで、 ツッコミどころ満載だ。 구 リは頭を抱える。

「え~……っと」

とりあえず、いままでの彼の発言を纏めてみる。

化学』を貸して欲しい。 できなくなるかもしれないから、 でさえ科学系の学部の中で発言力が弱い植物学部が、科学科に加入 「魔導で生み出した植物を、魔導科が『学研』で発表すると、 کے なんとかしたい。だから『植物の

゙ぉ゙゚゙゙゙゙゚゚

で発表できるのは来年だよ?」 「君、あたし達と同い年だよね?わかってる?あたし達が『学研』

「...... わかってるよ」

先輩や教授の名前で発表してもらえば、手柄は植物学部の物だ」 「大方、発明した植物を植物学部の奴らに渡すつもりだったんだ ろ。

「イオン君って植物学部志望の生徒じゃなかったよね?」

科学学部.....いや、総合科学学部志望らしい」

「らしい。じゃねーよ!!総合科学学部に絶対入るんだ!

ミーシャの発言にイオンが声を荒げる。

「それじゃ、何で植物学部にこだわるの?」

植物学部も『科学の父』が作った学部だからに決まってるだろ」

さも当然だという風に言われた事にユーリは首を傾げる。

「どゆこと?」

部同様『科学の父』が作った学部なんだ」 知らないの?植物学部もいま科学科入り確実って言われてい る学

へぇ~、あ、なんか聞いたことあるような... ... ないような?」

って考えている教授陣は多いって聞いてたけど...」 意を称して、『科学の父』が作った学部は全て科学科入りさせたい科学を発展させ、新たな技術を生み出した『科学の父』に敬

言いながらミーシャはちらっとイオンを見やる。

「生徒までそう思ってるやつがいるとは.....」

どこかぐったりした顔のミーシャをイオンはムッと睨みつける。 「悪い事じゃねーだろ?科学科に学部全部そろえば、 『科学の父』

がバラバラに伝えた技術を共有できるようになる!!科学技術のさ らなる発展には絶対必要な事だ!!」

のか 「だから、 『科学の父』 が作った植物学部も科学科に入って欲しい

「そう」

頷いたイオンにミーシャが溜息をつく。

な。 っているはず!!」 直筆の本にはすげー 「俺は『科学の父』 『植物の化学』 直筆の『植物の化学』 ぶっ飛んだ技術の設計図とかも書い にもきっと何か変わった植物に関する技術が載 が読 みた ίÌ てあるから

「それを『学研』で発表すれば、 植物学部は科学科入りできる。 ح

「おう」

渡すわけにはいかないな」 その熱意は認めるが、 それならますますお前に 9 植物の化学』 を

「.....何で?」

肉げに笑った。 きょとんと目を丸くするイオンにミーシャはくっと口角をあげて皮

容を『学研』 科入りさせてもらえない 「お前が言う事を要約すると、 で発表したい。 から、 という事だな?」 お前がこの『 植物学部 の 61 植物 まの研究内容では科学 の化学』 の研究内

「あ、ああ、まぁ.....」

どこか棘を含んだミーシャの言葉に、 なんて誰が決めた!?」 るのかっ!?お前は何様だっ!?植物学部の科学科入りが無理だ、 「いま植物学部で一生懸命研究している先生や先輩を馬鹿にしてい イオンは歯切れ悪く頷 61

ニーシャの怒声にユーリは首を縮める。

武人の父を持つにふさわしい迫力に息を飲んだ。

- 「なっ、別にそういうわけじゃあ.....」
- うなら、 ま発表 じゃあ何なんだ!?お前が『科学の父』の技術をそっ して『学研』で評価が得られると思っ お前は科学者にふさわしくない!!」 ていたのか !?もしそ くりその
- 「んだとっ!?」
- ちょっと!!待って!!落ち着いて二人とも!!」
- 小柄なミーシャの首元をカッとなったイオンが掴む。
- それを見下ろしたミーシャは何も言わずにイオンの手首を握っ を睨みつける。
- 一触即発の空気に、 慌ててユーリが割って入った。
- ら、どうなると思ってるの?」 「 待って、落ち着いて。 ここで科学科志望の生徒が乱闘なんかした
- まっている。 ミーシャとイオンの言い争いと不穏な空気に道行く生徒の視線が集
- を離す。 それに気付いたイオンが先に、 バツの悪い顔をしてミーシャ から手
- ってる」 「俺だって、 『科学の父』 の技術を丸パクしても意味ねえって わか
- 「じゃあ、何故?」
- の父』 魔導に対抗できるのは、 の弟子っていう人が魔導の攻撃を防いだの、見た事ある どんな科学技術だ?魔導を弾く科学技術なん 科学だろ?俺は一回だけだけど、 か聞いたことな 科学
- ぎゃ 植物みたいなもんで魔導を封じてた『科学の父』 いぞ?」 でも、 リは溜息をつく。 いぎゃいとまたも言い争いを始めたミーシャとイオンを前にユ 確かに俺は見たんだ!!何かよくわ かん ね の弟子の姿を!!」 ーけど、 何 か の
- 何か、 で発表するだろう植物に対抗する技術を発表したい 話がこんがらがってきた。 イオン君は魔導科 の生徒達 わけ

だよね?」

ああっ

と思っているんだよね?」できたら、 その技術は植物学部の立場をあげるモノ ならい

ああ

ユーリの再確認にイオンは頷く。

激しい嫌悪をにじませるイオンにミーシャとユーリは首を傾げる。 しいの?」 「さっきから気になってたけど、何でイオン君は魔導科の情報に詳 魔導科の奴らが、作ったあの植物、 アレは在り得ない」

· それは.....」

喋りかけたイオンはハッと我に返ると「何でもない」と首を振る。 ヤはキッとキツイ眼差しでイオンを睨む。 何となく不審なイオンの行動にユーリが首を傾げる一方で、ミーシ で?まだ『植物の化学』をまた貸しして欲しいと言うか?」

の存在も、それを作り出す技術も『植物の化学』 「参考までに話しておくが、ざっと見たところ魔導に対抗する植 には載っていない 物

「そう……か」

確かめてみるか?」

見るからに落胆した様子のイオンは疲れたように溜息をつく。

「いや。もういいよ。無理強いして悪かった」

じゃあな、 と背を向けたイオンはどこかに去っていった。

「何だったんだ?あいつ」

「さぁ?」

不機嫌な面持ちのミーシャの隣でユーリは首を傾げる。

「ところで、 ューリ。 これからどこに行くんだ?」

「ん?ああ、司書の仕事で、魔導科に.....

シャに問われたユーリはハッと顔を引き攣らせて、 馬車停を見

魔導馬車が一台馬車停からいまにも発車しようとしていた。

きゃ l つ !!待って!!待って!!乗ります!!乗りまーす!!」

「あ、ユーリ.....」

慌てて馬車に乗り込むユー リに置いて行かれたミーシャはぽつんと

一人、馬車停に佇む。

「.....行っちゃった.....」

はあ、 と溜息をついたミーシャは中庭の木陰で『植物の化学』 を 開

い た。

ふと、ユーリが口走った行き先を思い出す。

『学研』前のいま、 普通科の生徒が魔導科の校舎に入って大丈夫

そういえば、何故魔導科に行くのか聞いていなかったと思いながら、

なんだろうか

ページをめくる。

その、ページの上に影が落ちる。

怪訝そうに顔をあげたミーシャは目の前の人物に目を丸くした。

先生?」

11P戦う司書と魔導師達1(前書き)

長くなったので分けます。

魔導書を探して魔導科に侵入。 " 紋" はどうしておかしくなってし

まったのか?

- 1P戦う司書と魔導師達1

軽快な音をたてて、 ユー リの乗っ た魔導馬車が進む。

色を濃くし始めた木々の小道を抜けるとほどほどに大きな川とその 柔らかい色をした青く澄みきった空に浮かぶおもちゃのような雲、 に囲まれた城が見えた。 上に渡された橋、そしてその橋の奥には立派な門と鬱蒼と茂る木々

セフィ 大魔導師の卵達が学ぶ場所。 ルド学術院の中でも選ばれた秀才・天才が住まい、 未来の

『 セフィー ルド学術院魔導科校舎』

芸術性の高い優美な門、 つ校舎が聳え立つ。 奏でる美しい庭、王侯貴族の屋敷に遜色しない美しさと雄大さを持 石造りの巨大な門を抜け、 その奥に色とりどりの花々が完璧な調和を 鬱蒼と茂る森の中の街道を走った先には、

相変わらずいつ見ても、 学校のモノとは思えない」

に被さっ セフィ た低 – ルド学術院魔導科校舎』を見上げたユー い声に驚い て振り返る。 リは、 自分の声

前にちょこんと停車した魔導馬車。 セフィ リは脱 ルド学術院魔導科校舎前』 が力した。 その隣に、 と銘打たれた馬車停の看板の 見知った顔を見つけ

「......何やってるの?アヴィリスさん」

藍色の髪の美貌の魔導師は、 気づいたらしい。 無表情ながらもどこか嬉々とした様子で魔導馬車をいじくっ 声を掛けられて初めてユーリの存在に ている

変化に乏しいながらもキョトンとした顔でユーリを見やっ

「ユーリ?何故ここにいる?」

図書館司書の仕事。 魔導書の回収に来たの。 アヴィ リスさんは?」

「俺はこれから少し図書館に行く」

いつもながらの無表情。

アヴィリスの顔が顰められた。 しかし、 一瞬だけ、「厄介な奴に見つかった」とでも言うように

けられている<クラン>の紋章を見つめる。 <クラン^の紋章の他に着けていなければならない物がある。 一方、それに気付かなかったユーリは呆れ顔でアヴィリスの首に 本来ならば、 彼はこの

そう思いながら、ユーリは問う。

導師の仕事しなくてい 前から思ってたんだけど。 いの? アヴィリスさん、 王都で宮廷魔

ああ、 問題ない。 俺の穴くらい適当に誰かが埋めるだろう」

「ふ~ん」

ない。 ザラート王国の片田舎、 じを投げているユーリは実際のところ宮廷魔導師の仕事をよく知ら チュー リの学生であり、 魔導の理解にはさ

(宮廷魔導師って意外と暇なのかな?)

女性に気づく。 けたユーリは、 ま、いいか、と魔導馬車を弄るアヴィリスから魔導科の方へ目を向 ふと 魔導科校舎門前 の路地から走ってくる一人の

゙あ、オリアナさん...

ナの目が大きく見開かれ、 リが気づいたようにオリアナもユー 声が飛んだ。 リに気づいたのか、 オリア

「は、はいっ!?」「ユーリ!!その男を捕まえなさい!!」

条件反射。

ヴィリスの腕を握る。 司書見習いの頃、 指導し てくれた先輩司書の声を受けたユー ・リはア

- あ.....」

状況を理解する。 てくるオリアナを見たアヴィリス。 いかにも、 まった」 という顔でユーリとこちらに向かって走っ その顔を見たユーリは何となく、

゙..... すまん」

「 は ?」

突然の謝罪に、 ぽけっと顔をあげたユーリの額に鋭い衝撃が走る。

「あだっ!?」

額の痛みに思わず力が緩んだ途端、 アヴィリスが魔導馬車に駆け込

むのが見えた。

しまっ!?」

その瞬間。

「 ちぇすとおおおおおおっ!!」

哀れな姿だった。 顔をあげたユーリ きなトランクと、 馬車から弾き飛ばされて宙を舞う美貌の魔導師の の目に映ったのは、 魔導馬車の幌を打ち破った大

トランクが飛んできた方角には、 何かをブン投げた後のような姿勢

をしたオリアナの姿。

うな音を背景に、 金属があげる若い女の悲鳴のような音と、 ユーリは思う。 大きな木が倒れ落ちるよ

(......来るんじゃ、なかった。魔導科)

き哲学書』 では、 あなたが所持していた魔導書。 『黄金の夜明け』計三冊、 確かに回収させていただき 『パラケススの書』 7

それを恨めしそうに見たアヴィリスは不満げに呻く。 魔導書を詰めたトランクが軽い音を立てて閉じられる。

納得、いかん」

図書カードの登録を破棄させていただきます」 アヴィリスの恨めしげな視線を受けてもオリアナはどこ吹く風。 「説明は何度もさせていただきました。それでもご不満でしたら、

して項垂れる。 しれっとした顔で最終通告を下したオリアナに、 アヴィリスは敗北

リに同情する気は起こらない。 顔が良いせいで漂う哀愁も当社比大だが、 デコピンを喰らったユー

「うん。 オリアナさんも魔導書回収に出てたんだ」 保安司書だけじゃ人出足りないって。 まったく、

荒いんだから」 人使いが

嘆息したオリアナは、基本魔導と専門階で働く司書。 なはずの、 非戦闘要員.....のはず、 なのだが。 荒事に不向き

幌を突き破られた魔導馬車と宙を舞ったアヴィリスの哀れな姿を思 浮かべると、 どうにも認識を改めざるを得ない。

ちょっ 剛力があるのか....。 ンより重いものを持った事ありません、 と纏めている、見るからに文学系女子な風貌なのに、 と吊り目気味の目に薄い眼鏡をかけて、 みたいな細腕のどこにあの 明るい茶髪をきゅそのペ つ

ユーリはこれから?」 あたしはもうノ ルマの魔導書を回収し終えたから帰るけど。

しょ んぼりと項垂れたユーリの肩をオリアナは慰めるように叩く。

「がんばれ」

「.....はい

げんなりした顔のユーリにオリアナは苦笑しながら、 幌が壊れ た魔

導馬車に乗り込んだ。

なさいね?」 「まだ保安司書と諦めの悪い魔導師数名が戦ってるから、 気をつけ

「は~い。オリアナさん、お疲れさまでした」

軽やかに進む魔導馬車を見送ったユーリは細く溜息をつく。

な 「ほら、 回収が終わったらまた魔導書を貸し出してもらえるんだから。 絶望した顔しないでよ」 いつまでうじうじしてるんですか?アヴィ リスさん。 そん

「 お前にこの気持ち、わかるもんか」

わかりませんよ~だ。あたしは司書なんだから」

を鳴らす。 アヴィリスにデコピンを喰らった事を根に持つユー リはふんっ

そうかよ。ああ、そうだったな」

なに不貞腐れてるの?」 拗ねた子供みたいな言い方しないでよ。 てゆー か、 何でそん

不貞腐れたくもなる! あと少しで魔導原理が解き明かせたのに

「あ~.....。ご愁傷さま.......」

らしい。 普段から無表情で冷静なアヴィリスのキャラが崩壊している。 魔導師にとって今回の魔導書の強制回収はよっぽどショックだった *トークー フェィス
さも無念だと項垂れるアヴィリスにユーリは乾いた笑みを返す。

(魔導科は、大荒れね)

「行きたく、ないな~。魔導科.....

改築して出来たものであるらしい。 魔導科の建物は、 元はこのあたりに住んでいた王侯貴族の屋敷を増

るだろう。 えれば、彼らが住まう住居がどうなるか、 そのうえ、 魔導科に通う生徒のほとんどが貴族出身者である事を考 そのくらい大体想像でき

一応、学生寮という事でシンプルな外装だが、 うわ~。 初めて魔導科に来たけど、 すっごいなぁ~」 それでも郊外の貴族

そして、 してあった。 前庭には未来の魔導師達が住まうにふさわしい工夫が凝ら

の屋敷と遜色しないほど美しくて立派な屋敷である。

形を変えるトピアリー.....、 色とりどりに咲く花はもちろんの事、 のないユーリには全てが物珍しい。 普通科に通い、 水が色々な形に変わる噴水 魔導にあまり触れ ゚あう

あれ、いまの時期咲かないような花だよね?」

の貴族も何人 ああ、 温度調節のため か使ってい 。 る の魔導機がそこに入っているからな。 王都

「わ~。噴水の水の形が猫に変った」

作られたものらし ああ、 あれ も魔導機だ。 いな」 王城にもたしかひとつあったが、 ここで

すごいねぇ」

が徐々に力を無くしていく。 おのぼりさんよろしく目を輝かせていたユーリだが、 その感嘆の声

最後には顔を引き攣らせたうえに言葉がかなり棒読みだ。

ああ、 だからこそ、 残念な光景だな。 コレは」

は アヴィリスの視線の先、 いている魔導師の卵達がいた......。 芝生の上や点在する東屋で暗黒を背負い、 ユーリがあえて見ないようにしていた先に 項垂れてしくし

彼らのそばには必ず二人一組の王立学院図書館司書がいる。

うっ、 うっ、 ううっ

「え~と、 9 コルカサスの書』、こっちは『六芒星原理』、 \Box 魔導

薬学書』

「酷い、 、すっ、 Ú ひどい。 あんまりだ.....

達が魔導科の生徒から無情に魔導書を回収していく。 ユーリと同じく王立学院図書館司書のネームプレー **└をつけた司書**

「はいはい。 また優先して貸し出しますよ」 さっさと魔導書を返してください。 一時的な回収措置

オニーっ!!アクマーッ

ですから、

書を引っぱり出し こちらの司書は、 ている。 何らかの 魔導機でがっつり縛られた学生から魔導

地獄だな」

魔導科寮前の光景をアヴィ リスはそう評価する。

そんな、 魔導書の一時回収くらいで大袈裟な.

ないと?」 そちらの都合で一方的に魔導書を奪い取って行くこの行為が酷く

ギロッと見下ろされたユーリは乾いた笑みを浮かべる。

魔導書を無理やり奪い取られたアヴィリスも気持ちは彼らと同じら

大人しく魔導書を一時回収させてもらえたら、 まぁまぁ、 アヴィリスさんがされた事は、 こちらは... まぁ、 特 殊 ?

ドッ.....ッゴオオオオオンッ

うから響いた轟音で掻き消された。 リの声は魔導科寮の隣、 美しい 深紅の薔薇が茂る生け垣の向こ

「『探求の館』の方からだな」

·

くる。 アヴィ リスが見つめる先、 『探求の館』 がある方から声が聞こえて

るように、 くそうっ だから!!一時的なものですから!!回収中はこちらに宿泊でき 配慮をつ!!」 !せっかくの魔導書を返してたまるかああっ

あと20ページで読み解けるんだ!!返せるかああああっ

「魔導書を返してくださーい!!」

から轟音が聞こえる。 探求の館』で抗争中の魔導師と司書もいるらしく、 7 探求の館』

阿鼻叫喚とはこのことだろうな」

何で魔導師達はあそこまで抵抗するんだか...

ぽつりと呟いたユー リはハッとアヴィ 表情に乏しく基本的に物事に無関心なアヴィ は別人のように情熱的で探求心にあふれている。 リスの方を見上げる リスだが魔導に対して

えばどうなるか.....。 そんな彼にうっ かり魔導師の魔導書への探求心を問うような事を言

きたときに、 っかり聞いてしまった事がある。 以前、 『禁制魔導書』階に連れて行って欲し 何故そこまでして『 禁制魔導書』 階に行きたいのかう いとしつこく頼んで

魔導書』 その時は、 が魔導師にとってどれだけ価値があるのか説かれた。 二時間くらい 『禁制魔導書』 につい て講釈され、 禁制

魔導技術研究学会が近いからだろうな」

「ヴァルプルギス?」

はあまりにあっさりした答えに拍子抜けする。 延々と魔導書についての演説及び講習をされるかと身構えたユー IJ

年の最優秀者はきゅう」 「知らないのか?王都で開かれる魔導技術の発表会があるんだ。 今

今年の最優秀者がどうなるのか、 聞くことはできなかった。

ドオオ オンッ ガッシャー

ゴラアアアアッ !貸し出し中の魔導書を返せー つ

「ぎゃああああっ!?」

が突き刺さった。 鶏が絞められたような悲鳴と共に魔導科寮の前庭に突如として轟音

12P戦う司書と魔導師達2

計算尽くされた調和の下、 土煙が立ち上がる。 美しく整えられた庭の一部にもうもうと

弾けて火花を飛ばす。 土煙が視界を塞ぐ中、 不完全に発散された魔力の残滓がパリパリと

(魔導の不完全爆発?)

アヴィ リスは一瞬で爆発原因を割り出し、 身構える。

な、何だ?」

「 ごほっ、 くしゅっ !!」

土煙が視界をふさぎ、庭にいた人々が煙にむせる中、 爆心地にひと

つの人影がむっくりと立ち上がる。

何かを引きずるような鈍い音と規則的な足音と共に人影がこちらに

近づいてきた。

- 7 !!.J

腕に覚えのある魔導師や魔導科生徒、 司書達が身構え、 人影を警戒

する。

刹那、一陣の風がふわりと煙を裂く。

「ろ、ロラン.....さん......」

つしなやかな体躯の男。 土煙の中から出て来たのは、 いぶし銀のような色合いの髪と目を持

ん?ユーリか?」

の顔馴染みの司書が、 図書館で見た事のある男の人の顔面を

がっ もう一方の手には重厚な装飾がされた本。 ちり片手で掴んでぶら提げてい た。 魔導書がある。

「魔導書の回収ですか?」

「ああ」

脱力する。 いつもと同じ 口調で飄々とした態度を崩さないロランに司書達は皆

いいんですか?こんな、乱暴に.....」

IJ の視線の先には、 木つ端微塵になっ た 7 探求の館』 の窓と大

きなクレーターが開いた魔導科寮の前庭。

だが、 師が哀れになってくる。 ない魔導師と無傷でピンピンしているロランを見るとさすがに魔導 何をどうしてこうなったのか、さっぱりわからない。 ロランに片手でがっちり顔面を握られながらピクリとも動か

・ユーリ。それはコレ見てから言え」

に吐き捨てる。 眉を顰め、 その体躯にふさわしい厳しい顔をしたロランが苦々しげ

見返しに記された、 ロランが回収した魔導書の見返しを開いてこちらに掲げられた。 知を司る女神をモチーフにした" 紋 その

力が発光していた。 わずかな。 一部が歪に歪んでいる。 紋" のブレだが、 そこからパチパチと帯電するように魔

それを見たユーリはぎょっと目を見張る。

"紋"を剥がそうとしたんですか!?.

ああ、 こいつの持ってる魔導書の" 紋" の魔導に異変があっ たか

5 こい 5 思った通りだ!!」 つは"紋"剥がそうとした前科持ちだから!!踏み込んでみた 最優先で回収して来い っ て館長からのお達しでなっ !前にも

しません~っ! いだだだだっ いだっ **!!すみません!!すみません** もう

せねぇ っざけんな!!前は未遂だったから見逃したが、 エリアー ゼ館長の所に一緒に来てもらう 今回はもう見逃

魔導師 ロランの手の中でびくんびくんと釣りあげられた魚のように痙攣す の顔面をロランの指がみしみしと鈍い音を立てて締め上げて

る魔導師を魔導師の卵達は蒼褪めた顔で注目する。

Ń 奴は何者だ?修繕専門の司書じゃ なかったのか?

荒事に慣れているのか? 違いなく司書としての仕事をしているはずの彼は何故、 因となった司書を交互に見やりながら、アヴィリスは問う。 ロランという司書には王立学院図書館で何度か会った事がある。 とうとう動かなくなり、 息絶えた (ようにみえる) 魔導師とその原 あそこまで

時はいろんな業務を手伝ってくれるの」 テラン司書だから、 ううん。 保安司書, ロランさんは基本的に図書館の保安と図書の保護を行っ なの。 大量に破損図書が出たときとか、 でも、 ロランさんは手先が器用だし、 手が空い

·

なるほど、とアヴィリスは頷く。

王立学院図書館は広い。

そ の中で犯罪行為が起こらぬよう取り締まり、 図書を盗み出したり

されないよう守るのが"保安司書"の役割。

荒事に慣れているように見えたのは彼の職務内容によるものらしい。 がが息を切らしながら走ってくるのに気付いた。 一 応 納得したアヴィリスは、 ふと、 『探求の館』 から癖っ毛の男

「.....あれは」

見覚えがある顔にアヴィリスは目を細める。

「あ、ネロさん」

以前、 破させてしまった司書である。 『始まりの叡智』 のペー ジをうっかり読み上げて修繕室を大

「遅いぞ。ネロ!!どこで何してたんだ?」

置き、 走ってきたネロはオリアナが持っていたのと同じトランクを足元に 荒い息をしたままロランを睨みつける。

に突っ込んで何でそんなピンピンしてんですかッ!?」 「ロランさんが『探求の館』 人達に怒られてたんですよ!?っというか、 に穴開けたせいで何故か! 窓に穴開け て隣りの庭 俺が管理

「慣れだ。慣れ」

「有り得ないっ!!」

涼しげな顔で、 おそらく、 しれっと言い捨てたロランに、 この場にいる全員がそう思っ ただろう。 くわっとネロは噛み

たのもこいつのせいだぞ?」 「うるせーな。 大体、 そこの窓ぶち抜いたのも、 ここの庭に穴開け

うに唇を尖らせた。 ぶらん と力を失っている魔導師の体を揺らしてロランは不満そ

魔導攻撃された癖に、 何でそんなにピンピンしてる

んですか!?」

「気合いだ」

嘘つけええっ

なおもキャンキャンと喚くネロを五月蠅そうに見下ろしたロランは

「アレ出せ」と片手を差し出す。

た。 ネロはむすぅっとした顔でトランクから『魔封じの棘』を取り出し

赤い毛糸玉のようなそれを見た途端、 アヴィリスが嫌そうに顔を顰

にとって不名誉なものらしい。

迷子のなった魔導書の事件で『魔封じの棘』

に拘束された記憶は彼

だろう」 アホ ・殺す気か!!それじゃなくて、 拘束用の魔導機があった

「あ?コレですか?『 白枷。

「それだ」

「ちょっと待て」

自分たちの行動に「待った」 司書二人のやり取りを聞いていたアヴィリスが突然声をかけた。 を掛けられたロランはいささか不満げ

に顔を顰めて彼を見下ろす。

何だ?」

魔封じの棘』 に拘束されると、 死ぬ事があるのか?」

魔力吸い尽くされると、 さすがの魔導師も死ぬだろ?」

きょとんとした顔で、 さも当然のようにロランが言う。

頷く 意外な事を訊かれたという顔をするロランの隣でネロがうんうんと

ないですね 9 魔封じの棘』 の魔力吸収量に耐えられた魔導師って聞いたこと

魔力吸い尽くされて死にかけた魔導師は聞いたことあるけどな」

さらっと言われた危険発言にアヴィリスは顔を引き攣らせる。

をポイポイ投げつけられていたのだ。 ルキアルレス達と戦ったあの夜、 自分はそうとは知らずに殺人兵器

され、 おそらく、 木乃伊になって死んでいたのだろう。 あのまま『棘』 に囚われていたら自分は魔力を吸い尽く

(危なかった.....ッ!!)

ドキドキと不規則な鼓動を繰り返す心臓に手を当てながらアヴィ スは冷や汗をかく。 IJ

「縛れ『白枷』」

ロランの声に反応して白い色の鎖が無情に魔導師に絡みつく。

の魔導書を回収する」 ネロ、 お前はこのままこいつを館長の所に連れてけ。 俺はリスト

よ?本当に激怒してたんだから」 了解.....。あとで『探求の館』 の管理人達に謝っといてください

「気が向いたらな」

ネロからトランクを受け取った担いだロランは豪快に笑いながら魔 導科寮の中に入って行く。

普通の司書が魔導の不完全爆発の中から出て来て、 どうしてピン

ピンしているんだ?)

背中に寒い物が走るのを感じながらアヴィリスは首を傾げる。

借りている魔導書を死守すべく、 らわせようとしたのだろう。 彼らの話から予想すると、 いまネロに引っ立てられていく魔導師は 回収に来たロランに魔導攻撃を喰

拍子に不完全に成功してしまった魔導が爆発、 その魔導攻撃をロランは詠唱を止める事で防いだようだが、 庭に投げ出されたら 何かの

普通の人間なら、 あんな風にピンピン動き回れたりしない。

王立学院図書館は魔導師からしても不思議な場所だが、 人間もビックリ人間なのだろうか? そこで働く

「....... 王立学院図書館司書は化け物なのか?」

「あの人は特殊です!!」

緒にすんな!!とその場にいた司書全員が叫んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 など 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きインター 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 ています。 そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ 誰もが簡単にPDF形式 ト関連= ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 は 2 0 存書籍 の タイ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n4107u/

未返却魔導書と科学のススメ

2011年10月15日22時08分発行